宇宙激震！
無敵であるはずの伝説超人たちが、
自らの必殺技で次々と惨殺された!!
生き残った伝説超人は、わずかに４人。
万太郎たち新世代正義超人は、
彼らを援護するため、
それぞれ地球へと向かったが……!?
大人気コミックスの完全オリジナル・
ノベル特別版、堂々登場!!



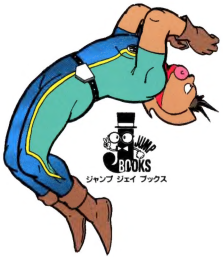
きれいに切り取ってパスケースに入れよう

カバーイラスト／ゆでたまご
カバーデザイン／亀谷哲也



キン肉マンII世SP
ゆでたまご・小西マサテル
SHUEISHA
115

9784087031157
1920093007436
ISBN4-08-703115-2
C0093 ¥743E
定価 本体743円+税





ゆでたまご
YUDETAMAGO

'79年から少年ジャンプで「キン肉マン」連載開始。'83年にテレビアニメが公開され、キン消しも合わせ、爆発的ヒットとなる。「II世」も大好評快進撃中！



小西マサテル
KONISHI MASATERU

香川県出身。明治大学英米文学科卒。テレビ・ラジオ番組の構成作家。「ナインティナインのオールナイトニッポン・コム」の構成を手がけて、はや８年。

SHUEISHA

JUMP j BOOKS

JUMP j BOOKS

キン肉マンII世SP 伝説超人(レジェンド)全滅!

ゆでたまご◉小西マサテル

キン肉マンII世SP 伝説超人(レジェンド)全滅!

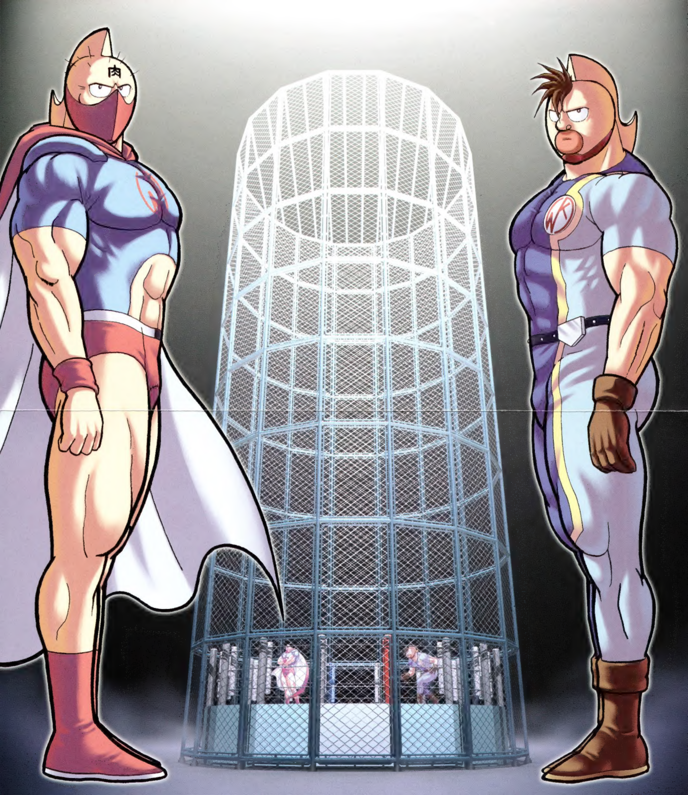
KINNIKU MAN II SEI SP
LEGEND ZENMETSU!



ゆでたまご

小西マサテル


WPS


肉



CONTENTS

PROFILE



アレキサンドリア・ミート

■出　身:キン肉星

■趣　味:超人格闘技研究

正義超人の頭脳!!

ALEXANDRIA MEAT

新世代超人(ニュージェネレーション)最強のDNA!!

KINNIKU MANTARŌ

キン肉万太郎

■出　身:キン肉星

■好　物:カルビ丼、ギャル

■必殺技:キン肉バスター
キン肉ドライバー
マッスル・ミレニアム



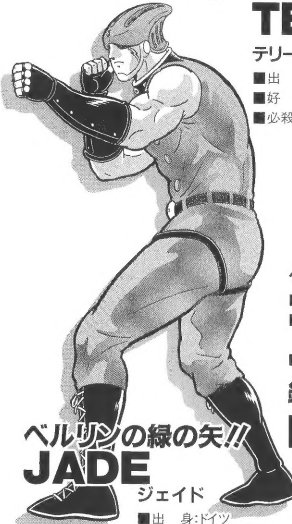
気はやさしくて力持ち!!
SEIUTIN

セイウチン
■出　身:アイルランド
■好　物:生魚(魚介類)
■必殺技:蹴り/生魚の早食い



テキサスの暴れ馬!!
TERRY THE KID

テリー・ザ・キッド
■出　身:アメリカ・テキサス州
■好　物:ピーナッツ、ナンパ
■必殺技:スピニング・トゥホールド
　　　　カーフ・ブランディング



ケビンマスク
■出　身:イギリス
■趣　味:倒した敵を
　　　　背中の刺青（タトゥー）に彫る
■必殺技:ビッグベン・エッジ

鉄面の貴公子!!
KEBIN MASK



ベルリンの緑の矢!!
JADE

ジェイド
■出　身:ドイツ
■好　物:エッセン夫婦手製の
　　　　ハムとソーセージ
■必殺技:ベルリンの赤い雨

～はじめに～

ミートくん＆初代キン肉マン・キン肉スグル（現キン肉星第58代大王）からのご挨拶(あいさつ)

出囃子(でばやし)……「キン肉マンGo Fight！」

ミート「どうも皆さん、ご無沙汰してます！　アレキサンドリア・ミートです！」

スグル「レオナルド・ディカプリオです！」

ミート「――あのねぇ王子、じゃなかった大王……
いくら顔が見えないからって、挨拶くらいはキチンとやりましょうよ。
なんたって、十数年ぶりに僕らに会うって人たちもいるんですから」

スグル「そうだったなミート、スマンスマン。えーと、改めまして、ご挨拶を。
私が〝初代キン肉マン〟こと、ブラッド・ピットです」

ミート「キン肉スグルでしょ！　いいかげんにしてください！
だいたい、そのシワクチャの顔……どこがブラピなんですか？
もう54歳なんですから、ちょっとは落ち着いてくださいよ！」

スグル「あッ、あ〜ッ！　年のことを言いよった！　黙ってたらわかんないのに！
近所のスナック行くときは、48歳で通してるのに！」

ミート「コテコテのおっさんか！」

スグル「──フン、そりゃあミート……お前はいいよなァ〜！
超人保存装置(ブリザーブカプセル)で冷凍保存されてたおかげで、
いまだに若いまんまなんだもんなァ〜！」

ミート「もう、すぐスネるんだから。
でも、スグル大王！　こうして久しぶりにふたりで会うと……
我々が離れ離れになった日のことが、
まるで昨日のことのように思い出されますねぇ」

スグル「そうだなぁミート！　あれは忘れもしない、いつだったか──」



ミート「忘れてるじゃないですか！」

スグル「今から28年前。ワシが、キン肉星王位決定戦に勝ち残った日のことだった」

ミート「覚えてるんですか！」

スグル「……相変わらず速射砲のようなツッコミじゃの〜ミートよ。
ワシャ、嬉しいぞ」

ミート「誰かさんに散々、鍛えられましたからね。
でも……今でも想いだすたび、胸が高鳴ります。
あの輝かしくも懐かしい、黄金の日々……
世界の伝説超人たちが一堂に会してしのぎを削った〝超人オリンピック〟！
〝七人の悪魔超人〟との死闘！

〝黄金のマスク〟を賭けた悪魔将軍との一騎打ち！
〝夢の超人タッグトーナメント〟！
そして、貴方が見事に王位を勝ち取った〝キン肉星王位決定戦〟――
キン肉星に戻られた貴方は、第一子・万太郎様を世継ぎとされた……
ボクは地球で超人保存装置に入って、来たる宇宙の危機に備えてた……
あれから、はや幾年。
雄々しくもアホアホにご成長された、万太郎様のご雄姿を見るに及び……
このミート、感慨を覚えずにはいられません」

スグル「グーグー」

ミート「って起きんかい！」

スグル「ムニャムニャ……ワシの牛丼を返せ〜！」

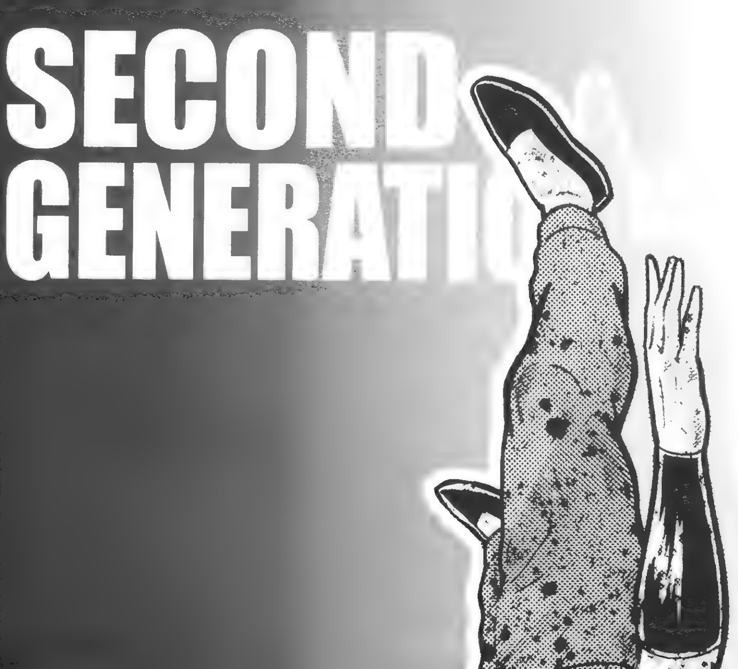


ミート「えっと、皆さん、すいません。
スグル大王が寝ちゃったんで、ボクのほうからご説明を……
この物語は、スグル大王の第一子・〝キン肉マンⅡ世〟こと、
キン肉万太郎王子の活躍を描く番外編です。
伝説超人(レジェンド)たちが次々と殺されるという、未曾有(みぞう)の連続殺人事件！
果たして万太郎様を始めとする新世代超人(ニュージェネレーション)たちは——如何(いか)にしてこの怪事件に
立ち向かったのか？
それじゃ皆さん——最後まで、ごゆっくり！」

スグル「牛丼を返せ〜！」

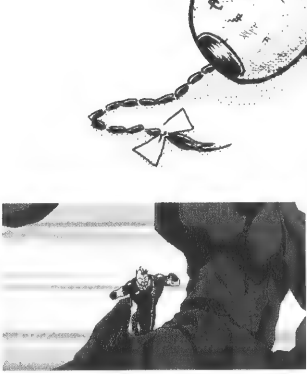
SECOND GENERATIONS




SECOND
GENERATI

第一章　合掌！国士無双拉麺男(ラーメンマン)居士





1

巨大な夕陽が沈まんとする、悠久の中国大陸・揚子江の辺。
吹きすさぶ黄砂の嵐の中に――辮髪のシルエットが、ぼうっと浮かび上がる。
「確か、このあたりの筈だが――」
男はそうつぶやくと、深みをたたえた双眸で、砂塵の中をねめ回した。
顔に刻まれた皺は、高齢を隠しおおすべくもない。
だが。
功夫服に包まれた、はちきれんばかりの肉体は、全盛期となんら変わることのない佇まいを醸し出していた。
「フン――それで後を取ったつもりか？　舐められたものだな、私も」
男はニヤリと笑うと、〝背後の影〟に向かって、一枚の紙を放り投げた。
「こんなモノを送りつけてきたのは貴様か……後悔することになるぞ」
砂塵に舞う、その書状には――墨痕も鮮やかに、こう書かれてあった。

『ラーメンマンに告ぐ！　本日の黄昏どき……〝砂時計〟にて、貴殿を弑し奉る』
夕陽が地平線に没した、ちょうどその瞬間――
吹き上げられた黄砂が空に舞い、頭上から激しく降り注ぎ始めた。
男の全身を容赦なく石礫が襲う。
視界は全く閉ざされ、寸分先も見ることはできない……
この地が〝砂時計〟と呼ばれる所以である。
だが、男はひるむ様子もない。
「ここを、闘いの地に選んだのは誉めてやろう。
だが、闘龍極意書に曰く――〝気配は、視力に勝る〟！」
その刹那――彼は背後の影に向かって跳んだ！
「竜巻旋風脚！」
功夫靴の切っ先鋭いつま先が、〝背後の影〟にヒットする――筈であった。
だが。
なぜかキックは、むなしく空を切り……男は、どうとその場に倒れこみ、砂を噛んだ。
（――なぜだ？　あの闘気からすれば…



私の蹴りは、確実に敵の顔面に的中していた筈だ！）
超人・ラーメンマンの脳裏に、長らく感じたことのない感覚が、ふっとよぎった。
それは——人間たちが〝恐怖〟と呼ぶ感情なのかもしれなかった。



2

200X年。悪行超人は根絶やしとなり、宇宙は平穏無事な日々が続いていた。
平和ボケなのか、あるいは天然ボケなのか。
キン肉マンII世・キン肉万太郎は、一族に伝わる闘いの魂をすっかり忘れ、享楽的な日々を送っていた。
女の子たちをとっかえひっかえ連れ回し、連日のごとくデート漬け——
そして今夜は。
万太郎が〝本命〟と目している少女とのデートである。
カウンターに並んで座るふたりのツーショットは、どこにでもいる年頃のカップルとして、ごく自然と店内の風景に溶け込んでいた。
「凛子ちゃん、今日は君の誕生日だね——なんでも好きなもの、頼んでいいよ」
凛子と呼ばれた少女は、いつもの恰好とは違い、少しばかり背伸びした黒のワンピースに身を包んでいる。



だがその表情は、なぜか険しい。
「またァ〜遠慮しちゃって、カワイイんだからァ！　……あぁ、君ィ」
パチンとキザに指を鳴らし、万太郎が店員を呼び止める。
「——この店で、一番高いやつ持ってきてくれるかな？」
「といいますと……特盛でよろしいですか？」
「思い切って卵も大奮発しちゃおうかなぁ！　あ、ツユダクでお願いね」
「かしこまりましたぁ！　牛丼特盛ギョク二丁、ツユダクで！」
少女が、アキレ顔で席を立つ。
「万太郎……あたし、もう帰る！」
「えぇッ！　どうしてよ？　せっかく父上ご推薦の牛丼星まで連れてきてあげたのに！
あ、やっぱボク行きつけの、カルビ丼星のほうが良かった？」
「だからそういう問題じゃなくて！」
「そうか、わかった！　凛子ちゃん、ダイエット中なんだ？
そういえばこの腕が、前よりも太くなったような気が……」
と、次の瞬間！　バチーン！　と張り手が万太郎の頬を直撃！

「い、痛いっ！　突然なにすんだよォ……父上にだって殴られたことないのにィ！」
万太郎の悲痛な叫び声を背に……彼女は店から出ていってしまった。
「──ちょ、ちょっと待って！
せめてガリだけでも一緒に食べようよ！　り、凜子ちゃーん！」
そこへ。
「II世。こんな辺鄙な星にいたんですね──探しましたよ」
と、溜息をつきながら店に入ってきたのは──
「あれッ、ミート！　助かるなぁ……わざわざ牛丼代、払いに来てくれたのね？」
「違います、どこまでセコいんですか！
だいたい女の子とのデートで、いきなり牛丼はマズいでしょう」
「なに言ってんの？　マズくないよぉ～この星の牛丼は？」
会話が全く噛みあっていないことにも気付かないまま、運ばれてきた牛丼ふたつをひとりでパクつき始める万太郎……
こうなると、何を話し掛けてもムダである。
横に座り込み、辛抱強く食べ終えるのを待ってから、



「――さて、と。II世……話を、聞いてもらえますか」と話を繋ぐ。
「どうしたってのよ、そんなテンパった目して……ガリ、食べる？」
「いりません。いいですかII世……耳をかっぽじって、ようく聞いてください！」
「店員さん、耳カキある？」
「本当にかっぽじらなくていいってば！　こっちを向きなさいII世！
あなたが毎日遊び呆けている間に……
地球では今、とんでもない事件が頻発してるんです！」
「どういうことよん？」
まだ食べたりないのか、ガリをつまみながら、気のない返事を返す万太郎。
だが……傍らで小さく震える肩を見て――さすがに箸が止まる。
「どうしたミート……泣いてるのか？」
「泣きたくもなりますよ！
バッファローマンも死んだ！
ウォーズマンも死んだ！
ウルフマンも殺された！

それなのに……それなのに、あなたときたら！」

「——なんだって!?」

＊

フラッシュバック。

瞬間、万太郎の脳裏(のうり)に、幼(おさな)き日の記憶が断片的によぎった。

父・キン肉スグルから、子守唄(こもりうた)代わりに幾度(いくど)となく聞かされた、若き日の激闘の話

——

そこに必ず飛び出してくるライバルたちの名前は、忘れようもなかった。

『いいか、万太郎。

これが、バッファローマンのハリケーンミキサーを食らったときの傷だ……』

『こっちは、ウォーズマンのベアークローで穿(うが)たれた穴だよ……』

彼らの名を口にするとき——

父親は決まって、自分の体に残された古い傷痕(あと)を、愛(いと)おしそうにさするのだった。



中には明らかに骨まで届いているような、ひどい傷痕もあった覚えがある。
幼かった万太郎には、なぜ父が、それほどの傷を受けながら笑みを浮かべているのか、理解できなかった。
でも。万太郎は、父のそんな仕草が、たまらなく好きだった。
いつもはてんで頼りなく、尊敬の対象には程遠い父親。
だが、ライバルたちの話をする時の父の顔は、柔らかな笑みを浮かべていながらも……息子といえど、思わず気圧されるような迫力に満ちていた。
そして、今思えば、それこそが。
死力を振り絞って闘った者同士だけが分かち合える〝友情パワー〟の一端なのかも知れなかった。
そのライバルたちが死んだなんて……まさか。

「――ちょっと、ねぇ！　聞いてるんですか、II世！」
ハッと我に返る万太郎。
「あぁゴメン、ミート。で……彼らはいったい、どんな風にして殺されたんだ？」

「だから言ってるでしょう！
バッファローマンは、ハリケーンミキサーで――
ウォーズマンは、スクリュー・ドライバーで――
そして、ウルフマンは、合掌捻（がっしょうひね）りで――
みんな……みんな、自分の必殺技（フェイバリットホールド）で殺されていたんですよ！」
悲痛な叫び声が耳朶（じだ）に反響する中……万太郎は、ただ呆然（ぼうぜん）とするのみだった。
（無敵の伝説超人（レジェンド）たちが……自分の必殺技で殺された!?　そんな馬鹿（ばか）な！）



3

大キン肉星雲第5惑星・キン肉星——

キン肉王家・マッスルガム宮殿の大広間は、時ならぬ大勢の客人たちでごった返していた。

頻発する怪事件を受け、超人評議会が新旧正義超人たちを非常招集。

緊急宇宙捜査会議が開かれることとなったのだ。

このため、通常は王位禅譲の儀式でしか使われることのない大広間が、28年ぶりに開放されていた。

先祖の顔を彫り込んだレリーフが並ぶ古色蒼然たる石壁が、王家の歴史を感じさせる。

会議開始の時間までは、あとわずか。

だが。

中世ケルト神話の〝円卓の騎士〟の逸話を髣髴とさせる、中央に鎮座した円形の巨大テーブルには……

まだ誰ひとり、つく者はない。
皆、立ったままそれぞれに小さな輪を作り、今回の事件についての知る限りの情報を、ひそひそと交換し合っている。
厳粛かつ異様な空気——そこに。
「げぇ～カビくせぇ～！」
重い両開きの扉を開くなり、万太郎が大声で文句を垂れた。
「……よくみんな平気だよなァ！　バッカじゃないの？」
「シーッ！　しょうがないでしょう。この部屋しか空いてなかったんだから」
「そうだミート！　消臭剤、振りまいてくんない？　カルビ丼の匂いのやつ」
「余計クサくなっちゃうでしょうが！」
と、そこへ。
「よォ、万太郎。相変わらずアホだなァ」と声を掛けてきたのは——
あの〝テキサス・ブロンコ〟テリーマンの息子・テリー・ザ・キッドである。
父・テリーマンは、正義超人の象徴として、徹底したクリーンファイトで鳴らしたものだった。



その反動からか……息子・キッドの鋭い眼差しからは、ラフファイトも辞さない自我の強さが見て取れる。
そして。
キッドの後ろから、おどけながら顔を出したのは――
「バァ～！　万太郎のアニキ、お久しぶりッ！」
「あッ、セイウチンじゃん！　元気してる？」
「元気、元気ィ！　アニキぃ～HF以来だなや！」
アンドロメダ星雲・マッスル星にある超人格闘術大学校・HF（ヘラクレス・ファクトリー）。
新世代超人たちは皆、14歳以上になると、このHFでの超人修行が義務付けられていた。
セイウチンは、このHFを優等の成績で卒業。
その太ったセイウチそっくりのヌーボーとした風貌とは裏腹に、彼の身体能力の高さは並外れたものがあった。
まさに〝気はやさしくて力持ち〟という言葉を、絵に描いて額に入れて飾ったような男

である。
「アニキ、あっちにジェイドもいるだよ！　おーい、ジェイドお！」
セイウチンに呼びかけられ、アングロサクソン系の端正(たんせい)な顔立ちの男が振り向いた。
ドイツの伝説超人・ブロッケンJr.の一番弟子・ジェイド——
HF時代から、そのヨーロピアンレスラー特有の折り目正しいファイトスタイルには定評があった。
キッド。
セイウチン。
そしてジェイド。
万太郎を中心に、たちまち卒業生たちの輪が作られ、話はいつしか、HF時代の思い出話に及んでいく……
今回の事件が旧世代の悲劇とあってか、若い彼らには今ひとつ、危機感が希薄(きはく)なのである。
「それにしても〝あの頃〟ってのは……」
と万太郎が思わせぶりに溜息(ためいき)をついた。



「――ホントに女っ気がなかったよなァ～！　今思うと信じらんないよ」
セイウチンがその言葉に引っ掛かる。
「えッ？　なんだァアニキ、〝あの頃は〟って？　……まるで今は女の子に不自由してないみたいじゃねェだか？」
「フフフ！　してないんだよなァ～これが！」
万太郎が、待ってましたとばかりに自慢モードに突入した。
「聞きたい？　聞きたいよね？　うん、みんなそんな顔してる！
え～とね、まずなんつっても本命は、階堂凛子ちゃんね。
スタイル抜群、巨乳炸裂！　ヴィジュアルも性格も、申し分なし！
ボクの中での本年度〝コギャル・オブ・ジ・イヤー〟受賞者です！
気が強くて怖いとこもあるけど、そこがまたいいのよ！
ちなみにこの子とは、昨日の夜デートしてたんだけどさぁ……
〝大事な会議があるんだ！〟なんつって、むりやり突き放してきちゃったんだよね。
彼女……泣いてたな」
「マジかよ！」とキッドも興味津々だ。

「で、凛子ちゃんに続く〝セカンド〟の女の子とは、おとといの夜にデートしたんだけどね。この子はこの子でまた、ボクにラブラブで――」

と、その時

「お前たち、いい加減にしないかッ！」

――大広間を揺るがすような怒声が響(ひび)いた。

しんと、部屋の中が静まりかえる……

声の主は――片隅(かたすみ)でひとり腕を組んで佇(たたず)んでいた、伝説超人(レジェンド)のひとり・ロビンマスクであった。

初代キン肉マン・キン肉スグル激闘の歴史――その初期を飾る最大のライバルであり、戦友である。

錆(さ)びが目立ってきた鋼鉄のマスク。

そこから覗(のぞ)く目の光は、静かな怒りに満ちていた。

「同窓会じゃないんだぞ。今日、なんのために集まったのか……貴様(きさま)ら、わかってるのか？」

だが、それを聞いて……キッドの目が、すっと細くなる。



「威張んじゃねェよ、おっさん――」
「やめとくだ、キッド！」
セイウチンが、顔色を変えてキッドの肩を掴む。
だがキッドは、その手を振り払いながら、
「おい、ロビン。あんたの息子はどうなんだ？　ここに来てもいねぇじゃねえか。
人に説教たれる前に、テメェの息子をちゃんと教育しろよ」
「――なんだと？」
静かに言い返すロビン。
だがその震える声からは、明らかに動揺の色がみてとれた。

大英帝国が誇るエリート正義超人・ロビンマスク。
彼の息子・ケビンマスクは、父親譲りの天才的な素質を持ちながら、厳格な超人教育に反発。
ある日突然、家を出奔した……
以来、正義超人たちの中で、ケビンの姿を見た者はほとんどいない。

万太郎たち新世代（ニュージェネレーション）超人たちが、HFで修行を積むこととなった時も、ケビンだけは現れなかった。
風の噂（うわさ）では、その頃ケビンは——
人間・超人の別なくストリートファイトを吹っかけては、血祭りにあげる日々を送っていたという。
悪行超人集団「d・M・p（デーモンプラント）」の一員になっていたとの噂もある。
そして、その背中には。
不気味な蜘蛛（くも）の巣と、倒した相手の姿のタトゥーが、所狭（ところせま）しと彫（ほ）られているという……
（——私は、どこで育て方を間違ってしまったのだろうか）
自らが、正義超人として真（ま）っ直（す）ぐな生き方を貫いてきたとの自負があるだけに——
なおのこと、父・ロビンの苦悩は深かった。
「——いいかおっさん、ようく覚えとけ！　あんたがそんなに口うるせぇから、息子がグレちまったんだよ！」
無言のロビンに対し、キッドがなおも突っかかっていく。



思わず握りこぶしを固めるロビン――
そこへ万太郎が、
「……まァまァまァ、おふたりさん！　そこまで！」と止めに入った。
「気分直しにボクのほうから、カルビ丼音頭を！
お手を拝借～！
あ、それ、
♪　カルビ丼のカの字は、カッカッカ～
♪　カルビ丼のルの字は、ルンルンルン～
♪　カルビ丼のビの字は……えーとミート、なんだっけ？」
「知りませんよ！」
ズッこける一同。
「見なさいII世！　……余計、ミョーな空気になっちゃったじゃないですか！」
「まぁいい、ミート」毒気を抜かれたのか、ロビンは苦笑まじりの声で言った。
「私が少しばかり口うるさすぎたのかもしれない。
お前たち、久しぶりに会ったんだものな……

少しばかり盛り上がるのも、無理からぬことだ。
本来ならケビンも、その輪の中にいたはずだが、な」
どこか寂しそうなロビンの声に、キッドも口ごもる。
「いや、ロビン。そんなつもりじゃ――」
「息子には、いずれ私のほうから必ず叱っておくこととしよう。
そろそろ会議の時間だ――さ、敬礼でスグル大王を迎えよう」

ロビンがそう言った瞬間。
王室お抱えの楽団が、大王入場のテーマを奏で始めた……
そして。
開け放たれた扉から、初代キン肉マン・キン肉スグル大王が、ゆっくりと、その姿を現した。
瞬間。大広間の一同に、声にならない驚きの色が走った。
（こ……これが、あのキン肉マンなのか？）
重要な儀式のときにしか身に付けることのない王冠と、王家ゆかりの黄金のマントはす



つかり色褪せ、昔日の輝きはまるでない。
だが、一同が驚いたのは、それらの装飾品のせいばかりではなかった。
（父上……一度に老けたな――）
万太郎もまた、スグル大王の顔を見るなり、そう思った。



4

新旧正義超人たちが粛々(しゅくしゅく)と円卓につき……宇宙捜査会議が始まった。
先帝・キン肉真弓(まゆみ)の席が空(あ)いたままだということが、今回の出来事の重大さを端的に示していた。
先帝を始めとするキン肉星の四大長老は皆、体調を崩(くず)して寝込んでしまったのである。
議長のキン肉スグル大王が、重々しく口を開く。
「それでは諸君(しょくん)。これまでの事件の経緯(いきさつ)を説明しよう――」

スグル大王の話によると――
伝説超人(レジェンド)たちのもとに、ある日、何者かからの挑戦状が届く。
老いたりとはいえ、そこは伝説超人。
挑戦を受け、愛する者に別れを告げ、ただひとりで死地に赴(おもむ)き――そして皆、二度と帰ってはこないのだ、という。



「――続いて、これを見てもらおうか」
スグル大王がよろよろと立ち上がり、円卓上のプロジェクターのスイッチを入れた。
大広間のビジョンに、亡き伝説超人たちの遺体映像が映し出されていく……

――カチャ。
『バッファローマン』
――という字幕と共に、凄惨なバッファローマンの亡骸の映像。

カチャ。
画面切り替わって、黒バックに字幕。
『死因……肋骨粉砕骨折・及び胸部の刺傷（鋭利な尖状の凶器によるものと推定さる）による失血死』

カチャ。

画面、再び切り替わって、字幕。

『〝ハリケーンミキサー〟と呼称される彼自身の必殺技を受けた際に見られる所見に酷似』

円卓に、溜息ともつかぬ、どよめきの声があがる。

——カチャ。

『ウルフマン』

カチャ。

『死因……頸椎粉砕骨折・及び中枢神経轢断による心停止』

カチャ。

『〝合掌捻り〟と呼称される彼自身の必殺技を受けた際に見られる所見に酷似』

——カチャ。

『ウォーズマン』

カチャ。



『死因……人工頭蓋骨陥没の衝撃によるマイクロチップ87％損壊・及び脳髄に達する刺傷による失血死』

カチャ。

『〝スクリュー・ドライバー〟と呼称される彼自身の必殺技を受けた際に見られる所見に酷似』

――カチャ。

『ジェロニモ』

カチャ。

『死因……』

ブウン――プツッ。

「――もうたくさんだ！」

そう叫びながら……プロジェクターを正拳で叩き潰したのは、ロビンである。

沈黙の中――粉々になったプロジェクターから立ち上った煙が、円卓の上を漂った。

もはや、生き残っている伝説超人（レジェンド）は、この、ロビンマスク。
初代キン肉マン・キン肉スグル。
そして、今日は所用で姿を見せていないふたり——テキサスのテリーマンと、ドイツのブロッケンJr.だけという有様であった。
いや……忘れてはならない男が、もうひとり。
その名前が——思いがけない形で、スグル大王の口から飛び出した。
「冷静になれ、ロビン。
そして今、また……
今度は、あのラーメンマンが行方（ゆくえ）不明になっているとの情報が入っておる」
静まり返る一同。
その重苦しい雰囲気（ふんいき）を、万太郎（まんたろう）が振り払った。
「——ハハ、みんな、何だまっちゃってんの？
あのラーメンマンが死ぬわけないじゃない！
今にもここへ姿を見せるかもよ？　……あ！　ラーメンマン！」



突然そう叫びながら——万太郎が大広間の扉を指差した！
一同が一斉に扉の方向を振り返る！

「……なーんちゃって！　アホが見る～ブタのケツ～」
——瞬間、部屋の空気が、カチンコチンに凍りつく。
「II世……最悪のギャグですよ。空気くらい読みましょうよ！」
「ミート……やってもうた……」
「やってもうたじゃないですよ！　見なさい、スグル大王を！　カンカンですよ——」
と、スグル大王を見ると、
「ヒ～！　ガハハハ～！」とひとり、机を叩いて大爆笑している。
「ってアンタもウケてどうするんですか！」
「あ、スマン、スマン……不謹慎じゃぞ、万太郎！　ゴホン！」
咳払いしてから、スグル大王が言う。
「——ということで、じゃな。
万太郎の言う通り、よもやあのラーメンマンに限って妙なことはあるまいと思うが……

このまま、手をこまねいておるわけにはいかん。
これは明らかに、ワシら伝説超人(レジェンド)に対する挑戦じゃ！
ロビンよ……お前もワシも、いつなんどき襲われるかもしれんぞ！」
「――――」
何か他の事を考えていたせいなのか……話しかけられたロビンマスクは、上(うわ)の空(そら)である。
「おい、ロビンよ！　聞ィとるのか？　しっかりせい！」
「……ん？　あ、あぁ！　そうだな……」
「――ったく、耳が遠くなったんじゃないのか？　年は取りたくないのォ～！」
自分のことは棚に上げ、吐き捨てるように言うスグル大王。
またもや円卓を覆(おお)った沈黙の中――
キッドが、手を挙げて発言した。
「大王。現場に、何か手がかりのようなものは残ってなかったんですか？」
「それが、まるでないのじゃ。
〝敵〟は、自分が出した挑戦状も、現場から持ち去っておる……
筆跡を調べることもできん！



遺留品の類いも、もちろん指紋も、一切残ってはおらんのだ……」
「そうですか」と、真顔の万太郎が言った。
「じゃあ父上。このままでは事件は……名球界入りですね」
「迷宮入りじゃ！　二千本安打打ってど～するんじゃ！　もうお前はしゃべるな！」
さすがのスグル大王も、万太郎のあまりの天然ぶりに付き合いきれず、少々キレ気味だ。
……と、そこへ。
王室の側近が現れ、スグル大王に、なにごとかを耳打ちした。
「……そうか。わかった」
そう答えるやいなや、スグル大王は――人目もはばからず、号泣し始めた。
今までの一連の事件で我慢していた感情が、堰を切ったように溢れ出たのだった。
「諸君……今、新たな情報が入った」
スグル大王は、嗚咽を漏らしながら……搾り出すように、言った。
「揚子江のほとりで、ラーメンマンの亡骸が発見された――
体は胴の部分で、真っ二つにされていたそうだ」

水を打ったように静まりかえる大広間。
その中で……
万太郎が、蒼白（そうはく）になってつぶやいた。
「ラーメンマンの必殺技（フェイバリットホールド）――キャメルクラッチだ」





5

ラーメンマンの亡骸（なきがら）がキン肉星に届いたのは、翌日の夕刻のことだった。
宇宙葬の定めに従い、伝説超人（レジェンド）たちの亡骸が収められたカプセルが、宇宙（そら）の彼方（かなた）へ次々と打ち上げられていく。
哀（かな）しいほどに美しい夕陽の光が、宇宙港（スペースポート）の発射台を朱に染める。
それは、地球の中国大陸で、ラーメンマンが最後に見た陽の光と、そっくりだった。
かつて生きた伝説として平和を守ってきた勇者たちが。
今、宵（よい）の明星（みょうじょう）となり——何処（いずこ）かへ消えていく。
そのさまを、万太郎（まんたろう）ら新世代超人（ニュージェネレーション）たちは、ただ声もなく見つめていた。
〝会議は踊る〟の言葉通り——
結局、前夜の宇宙捜査会議は事件の報告のみに留（とど）まり、なんの進展も見せなかった。
だが、このまま事態を放置しておくわけにもいかない。
残る伝説超人たちにも、いずれ魔の手が及ぶのは必至（ひっし）だからだ。

「万太郎、また会おう（アウフビーダーゼーエン）！」

宇宙葬が終わるとすぐ、ジェイドは、師匠（ししょう）・ブロッケンJr.がいるベルリンへ――

「腕を磨いておけよ、万太郎！　またな！」

テリー・ザ・キッドは、父親・テリーマンのいるテキサスへと帰っていった。

「キッドぉ～！　ジェイドぉ～！　気を付けろよぉ～！」

宇宙港のほとりで、ちぎれんばかりに手を振り続ける万太郎……

と、そこへ。

「II世――ちょっといいですか？」

「なんだよミート！　せっかくの〝友との別れ〟のいい場面なのにィ、ブゥ～。あ、オナラが」

「自分でブチ壊してるじゃないですか。

ところで――今回の事件を、どう見ます？」

「どう見るったって……手がかりがまるでないんじゃ、どうしようもないじゃん」



「いや――そうでもないですね」
「どういうこと？」
「ここだけの話ですが……ボクは、ケビンが怪しいと思うんですよ」
「な、なに～！　ロビンマスクの息子のケビンが！　フルネームで言うとケビンマスクが、怪しぃだってぇ～!?」
「声がデカ過ぎますよ、ここだけの話つってるでしょうが！　だいたいどうしてそんな説明的なんですか！」
「おいおいミート！……めったなこと言うもんじゃないよ」と、万太郎が珍しく怒りの色をあらわにする。
「ケビンは人殺しなんかできる奴じゃない！
確かにアイツは不良だけど、マスクを脱いだらボクよりブサイクらしいけど、あぁ見えてオナラが意外とクサイらしいけど、あとはええっと、」
「もういいですよ。
いいですか――伝説超人たちがあんな風に殺されてしまうってことは……
明らかに犯人は〝相当な実力を持つ超人〟の誰かです。

悪行超人が根絶やしとなった今、対象はおのずと絞られてきます。
もしケビンが伝説超人たちに対して、計り知れないコンプレックスを抱いていたのだとしたら――
そして……その思いが、異常に屈折した形で表れたのだとしたら？」
「考えすぎだよ、ミート……」
「まぁ聞いてください。
怪しいといえば、父親・ロビンの行動もそうです。
昨日の会議で――ロビンの様子が、どこかおかしかったのに気付きませんでしたか？
途中からは、明らかに上の空だったじゃないですか」
「そうか……ウンチをガマンしてたんだな？」
「小学生じゃないんですから！
恐らくロビンも、なんらかの理由で――息子に対して疑念を持ったのに違いない。
会議の後、ロビンはすぐに姿を消している……
宇宙葬にも参列しないなんて、いつもの彼らしくないじゃないですか」
「――」



「ね、なにもないって思うほうがおかしいでしょう？
きっとロビンは、ケビンを探す旅に出たんですよ。
自ら息子に会って、ことの真相を問い質すためにね……」
「もういい、ミート！　やめろ！」
「やめませんよ、捜査に感情は禁物です！
なんといわれようとII世……ボクは、ふたりの行方を探しに行きます！」
そういい残し、立ちさる後ろ姿を見送りながら――
万太郎は、ひとり、立ち尽くしていた。
（ケビンが……あのケビンマスクが、犯人なのか？）

発射台の古ぼけた鉄柱が、落ちる夕陽の最後の一片の光を浴びて、どこか哀しそうに煌めいた。
万太郎は――
鋼のマスクに隠されたロビンマスクの苦悩にゆがむ顔が、ダブって見えたような気がした。

SECOND GENERATIONS




SECOND
GENERATI

第二章　滂沱（ぼうだ）！　第三帝国闘技王武碌拳（ブロッケン）二世（Jr）居士





―

燻製(くんせい)肉と、ザウアークラウトのフライドポテト添え。
そして、ライ・ブレッド。

地球へと向かう宇宙艇(シップ)の中で。
窓から宇宙空間を見つめながら――
ジェイドは、万太郎(まんたろう)の母・ビビンバが作ってくれた手料理の味を思い返していた。

『ジェイドくん、ひとり暮らしなんでしょう？
たまには栄養があるもの食べないとね……
これあげるから、宇宙艇(シップ)の中で、お食べんなさい。こう見えても私、ドイツ料理は大の得意なのよォ！』
ビビンバはそう言って、ヘッセンの郷土料理が詰まった弁当箱を手渡してくれた。

（確か、万太郎の話では）
とジェイドは思った。
（ビビンバさんは、カルビ丼以外には——まるで得意料理なんて、なかったはずだ）
それなのに、わざわざジェイドのために作ってくれた、ドイツの田舎料理——
キン肉星の引力圏からまだ抜け出す前に、ジェイドはそれらを全部、平らげてしまっていた。
（あれが——〝おふくろの味〟って奴なのか）

ジェイドは、みなしごだった。
〝ジェイド〟という名前さえ、本名なのかどうかもわからない。
物心ついた頃から、周りの友だちからは、なぜかそう呼ばれていた。
それで、〝ジェイド〟と名乗っているに過ぎなかった。
だが、幼心にも——自分が、彼らとは違う不思議な能力を持っていることには、ハッキリと気がついていた。



そんなある日。
ジェイドは、師匠・ブロッケンJr.と、出会ったのだった。
『お前は、超人なのだ――』、
ブロッケンJr.は、ジェイドの動きを一目見るなり、そう言った。
酒に溺れ、尾羽打ち枯らしていたJr.は――
以後、ジェイドを世界最強の正義超人として育てることに、その後半生を賭けたのである。

ジェイドは、親代わりともなったJr.の手料理を、必死で思い返そうとした。
だが――
脳裏に浮かぶのは、血の滲むような辛い修行と、まるで禅問答のような師匠の言葉ばかりである。

『ジェイド！　今日はスクワットを2万回だ！』

『どうしたジェイド、走れ！　あとまだ78キロ残ってるぞ！』

『〝皮を斬(き)らせて肉を斬る。肉を斬らせて骨を斬る。骨を斬らせて髄(ずい)を斬る〟――これぞ、わが必殺技〝ベルリンの赤い雨〟の極意(ごくい)だ！』

(――フフ。オレは、なんであんな人のことが……父親のように大好きなんだろう)

ジェイドは、思わず苦笑いした。

――と。

窓の外を見つめる彼の目に……赤茶色に広がるガス状の醜(みにく)い星雲が映った。

命脈(めいみゃく)が尽きた、星々の残骸(ざんがい)。

かつてはあの星々も、まばゆいばかりの光芒(こうぼう)を放っていたのだろう。

血の色にも似た星の死骸(しがい)を見て――ジェイドの胸に、さざ波のように不安が広がった。

ふとコックピットの座席の下を見ると……

食べ忘れたライ・ブレッドがひとつ、落ちている。

(これは、師匠(レーラァ)に食べて貰(もら)うこととするか)



丁寧（ていねい）にブレッドを紙に包み、ポケットに入れる。

そして。

「無事でいてくださいよ——師匠（レーラア）」

そう声に出してつぶやきながら——

ジェイドは、ワープのボタンを押した。

2

ベルリンからシュツットガルトを抜けると、すぐに〝黒い森〟と呼ばれる、森林地帯に突き当たる。

鬱蒼と生い茂る木々の中――

ブロッケンJr.は、そこにいた。

その場所は、地上では、ただの森の中にしか見えない。

だが、はるか上空から、黒い森の〝その部分〟を見下ろすと――

そこだけ葉の色が赤茶けた木々で型作られた、忌まわしき鉤十字が浮かび上がる。

この地が、飛行機乗りたちの間で〝ナチスの地上絵〟と呼ばれている所以である。

上った月が、ちょうどこの〝ナチスの地上絵〟を、真上から俯瞰する真夜中。

ブロッケンJr.は、鉤十字が交わる中心地点にある、朽ち果てた切り株に腰を降ろしていた。

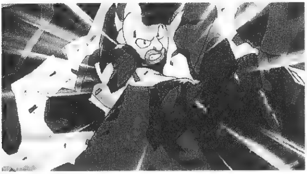
満月だというのに、その光は木々にさえぎられ――あたりは、漆黒の闇に包まれている。



風もなければ、虫の声も、鳥の鳴き声さえもない。
生命の息吹がまるで感じられない、〝ナチスの地上絵〟。
あるいは――
秋でもないのに不気味に赤茶けた葉が、あらゆる生き物の生存本能に働きかけて、その侵入を拒んでいるのかもしれなかった。
死のような静寂の中。
森のどこかで――〝かさり〟と枯れ葉を踏む音がした。

「さて、と」
座ったままでコートをゆっくりと脱ぎながら、ブロッケンJr.は言った。
「そろそろ始めないか。寒くてかなわんよ――そこにいるんだろう?」
森のどこからか――〝影〟が答えた。
《よく来たな、ブロッケンJr.。他の伝説超人たちの話は、耳にしていないのか?》

「私には関係のないことだ。相手が誰であろうと——挑戦されれば、受けて立つ」
〝影〟が、せせら笑った。
《フフン。超人スピリットとかいうやつか……甘いな。
みんなそう言って、死んでいったよ》
「——そんなもんじゃない。言ってみれば、ドイツ人魂だ」
《ドイツ人魂、ね》
〝影〟は、まだ笑っている。
《こんな話を知っているか？　あんたら〝誇り高きドイツ人〟の話だ——》
「無駄なお喋りはやめにしないか。堂々と姿を現して、かかってきたらどうだ！」
《まぁ聞けよ》と〝影〟は言った。
もはやその声は、笑ってはいない。



《戦争中の話だ――
ベルリンのクアヒュルステンダムの商店街をナチスの親衛隊が襲い、舗道はガラスの粉だらけになった。
ところが……その暴力と破壊の夜のことを、ナチス宣伝部は〝水晶の夜〟と呼んだんだ。
まさに悪魔の知恵さ。
残虐極まりない破壊行為を、美学にしちまったんだからな……》
「貴様――何が言いたい？」
《あんたの〝ベルリンの赤い雨〟とかいう必殺技も、おんなじようなもんだってことさ。
そのキザなネーミング……まったく、笑わせやがるぜ！
実態は、ロクなもんじゃねぇクセによ！》
「貴様！　――」
と叫ぶやいなや、ブロッケンJr.の体が、ふわりと浮き――

「――そこだ！」
高速回転しながら……両の手の手刀が、〝影〟の方向を襲った！
「〝ベルリンの赤い雨〟！」

一陣の風が舞い――
一瞬のうちに木々が、鋭利な斧(おの)で割られたかの如(ごと)く、スパーッと真横に斬(き)られていく！
だが。
〝影〟の体を襲った筈(はず)の手には……なぜか、木の感触しか残ってはいなかった。
（――馬鹿(ばか)な！　この私が、敵の殺気を見誤るなんて!?　……）
ブロッケンJr.を襲った、その奇妙な感覚は――ラーメンマンが感じた感情と、まったく等質の恐怖だった。

風がやんだ、その時。
《フフ。今度は、こちらの番だな》
――と、〝影〟が笑った。



3

マッスルガム宮殿の大王の間で。
スグル大王は、ひとり、大王の椅子に腰掛けながら……両の拳を、固く握り締めていた。
棚に飾られている「超人オリンピック」の優勝トロフィーに、ふと目をやると……
すっかり錆び付き、色褪せてしまっている。
(フフ。ワシも、年を取るはずだ)
彼は、自嘲気味につぶやいた。
今回の事件のショックで、さらに老け込んでしまったような気さえする。
(だが)
と再び気力を奮い起こす。
(仲間たちを殺した奴は、絶対に許さん!
誰の仕業かしらんが……早く、ワシの前に姿を見せろ!
この老骨に鞭打って――さし違えてでも、倒してみせる!)

そう誓うスグル大王の目は、まるで〝あの頃〟のように、爛々と燃えていた。
と、その時。
扉の外から、騒々しい声が響いてきた。

「父上、父上〜!」
「やめといたほうがええだよ、万太郎のアニキ!」

万太郎とセイウチンの声だ。
部屋に飛び込んでくるやいなや、万太郎は——得意気に、こう言い放った。
「父上。驚かないで聞いてね……犯人がわかったよ!」
「な、なんじゃと〜!」
腰を抜かすスグル大王を尻目に……
万太郎はソファに深々と腰を降ろし、名探偵よろしく足を組んだ。
「まずは、ボクの推理から聞いてくれるかな?」
「ちょっとアニキ……やめといたほうが……」と止めるセイウチンを無視して、



「ミートは〝ケビンが怪しい〟なんっってたけど……ボクには、どうしても信じられなかった。で、もう一度改めてボクなりに、事件の中身を振り返ってみたんだ」
「フン、それで?」
と、スグル大王が身を乗り出す。
「伝説超人(レジェンド)たちは、みんな自分の必殺技(フェイバリット・ホールド)で殺されていた……
ということは——〝人のマネをするのが大好きな超人〟が犯人ってことさ!」
「フンフン、それで?」
「……それでって何よ父上。ボクの推理は、以上だ」
「って終わりかい! 浅い推理じゃの〜!」
思わぬリアクションに、万太郎は不満そうだ。
「ひどいなぁ〜父上……せっかくのボクの名推理にケチをつけるなんて!
でもまぁ、コレを見たら納得するよ。実はもうすでに……犯人を捕まえてあるんだ!」
「な、なんじゃとぉ!」
「おーい! 連れてきてよ!」
万太郎が、パチンと指を鳴らす。

その合図をきっかけに……
キン肉王家の側近たちが、縄で縛られたひとりの男を、部屋の中に引っ張ってきた。
「それでは父上、紹介しよう！」
万太郎が、得意満面の笑みを浮かべながら言い放つ！

「ヘラクレス・ファクトリーきってのマネマネ超人！
コレすなわち、今回の一連の事件の真犯人！
マネラースネークだ！」

〝マネラースネーク〟と呼ばれた男——
コブラそっくりのその目は耳まで裂け、見るからに凶悪そうな面構えである。
後ろ手に縛られたまま……
彼は、感情のないトロンとした目つきで、万太郎を睨んだ。
だが万太郎は視線を外さず……ズバリと言った。
「さぁ、白状しろ！　犯人は、お前だろ！」



すると——観念したせいなのか。
マネラースネークは、ガックリとうなだれながら……ボツリと口を開いた。
『は……犯人は……』
その不気味な声に……スグル大王は思わず息を呑んだ。
するとマネラースネークは、続けて——こう言った。
『犯人は、お前だろ！』
「——？？？」
沈黙。
万太郎がクビをかしげながら、
「いや、あのね。ボクのマネしなくていいんだよ？」
するとマネラースネークも——

『いや、あのね。ボクのマネしなくていいんだよ？』
「だから、マネすんなって言ってんだろ！」
『だから、マネすんなって言ってんだろ！』
「いいかげんにしろってば！　会話になんないじゃないか！」
『いいかげんにしろってば！　会話になんないじゃないか！』
「チッキショ〜、人のマネばっかしやがって！　なに考えてんだよ！」
『チッキショ〜、人のマネばっかしやがって！　なに考えてんだよ！』
「おまえひょっとして……バカじゃないのか？」
『あんたに言われとうないわ！』
「ガハハハ〜！」



どっ、とウケる側近たち。
すかさずマネラースネークが、
『どうも、ありがとうございました～！』
と締めて……ペコリとお辞儀(じぎ)をする。

呆然(ぼうぜん)としながら――スグル大王がつぶやいた。
「な……なんじゃコイツは⁉　……」
するとマネラースネークが、
『コイツ呼ばわりは、ヒドイやおまへんか』と鼻を鳴らす。
『こう見えてもワイ、このネタで食うてるんですわ。
いえね、恥(は)ずかしい話ですねんけど……こちとら、あんまり格闘技は得意なほうじゃないもんでねェ、ヘラクレス・ファクトリーを退学になってもうたんですわ。
で、今では一流の〝お笑い超人〟を目指しておるんですが……
なんやワケ分からんうちに突然、万太郎クンに、とっ捕まってしまいまして。
ビックリクリクリ、クリックリ～』

「もういい!」スグル大王がわめいた。
「誰がこんな昔の漫才師みたいなヤツを連れてこいと言ったんじゃ! 連れていけ~!」
と、すかさずマネラースネークが、
『連れて行け~!』
「……ワシのマネまでせんでもいいとゆ~に!」
『ワシのマネまでせんでもいいとゆ~に!』
「お前ひょっとして……バカじゃないのか?」
『あんたに言われとうないわ!』
「ガハハハ~!」
どっ、とウケる側近たち。
『どうも、ありがとうございま~』
「連れてけぇ~! コイツを、連れてけぇ!!」とスグル大王がブチキレた!



「ハ、ハイっ！　ただいま！」
側近達が、バツが悪そうに、慌ててマネラースネークを連れ出していく……

真っ白な空気が漂う、部屋の中で。
セイウチンが、万太郎を肘で突っつきながら、
「だからやめとけって言ったじゃねェだか、アニキ」と言った。
「んなこと言ったって……名推理と思ったんだもん。
えーと、父上ぇ？　……ひょっとして……怒ってる？」
「もうよい」とスグル大王は、溜息をついた。
「どうせこんなこったろうと思っておったわ！
よいか万太郎！　そしてセイウチン！
これからお前たちは――すぐに、日本に飛ぶのじゃ！」
「え？　……日本に？」
「そうじゃ！
あえて本人たちの必殺技で殺すということはじゃな――

我々を相当、恨んでおるものの仕業に違いない」
「なるほど……新しい見方だね、父上！」
「普通はそう考えるじゃろ！
よいかな……わしは、悪行超人の誰かが、まだ残っていたか、あるいは復活したのではないかと踏んでおる。
根絶やしになったと思われておる、悪行超人。
もしその残党がいるとしたら……かつて数々の死闘が繰り広げられた、日本の地にいる可能性が一番高い！
万太郎よ！
そして、セイウチンよ！
日本にゆけ！
そして、必ずや――にっくき〝犯人〟を、見つけてくるのじゃ！」



4

「ウゲ〜！　くっさ〜！」と万太郎。
「しょうがねェでねえかアニキ。この船しか残ってなかったんだがら」とセイウチン。
彼らは、恐ろしいほどボロっちい宇宙連絡船に乗って——
一路・地球の日本へと向かっていた。
すえたような匂いが立ち込める狭いコックピットで、ふたりは肘掛けを必死で取り合っている。
「ちょっとセイウチン。どうでもいいけど、もっとそっちに寄ってくんない？」
「無理言うでねェだよアニキ〜。
なんたって、ふだりで重量オーバーギリギリなんだがら！」
「……デブ」
「あ、あ〜ッ！　今、なんか言うただか？」
「空耳だよ、空耳……デブ」

「あ～！　デブって言っただ～！」
怒ったセイウチンが暴れる。
その途端……連絡船の窓が、ガタピシと音を立てた。
「――オイオイ、暴れるなよセイウチン！」
「悪がっただ。でもマジで大丈夫だかね、この船？　……日本まで持てばええんだが」
「ホントだよね……そうそう、日本と言えば」
と言いながら、万太郎がポケットから封筒を取り出した。
「実はさ、セイウチン。日本からボク宛てに――こんな手紙が来たんだ」
それを聞いて――セイウチンが、顔色を変える。
「手紙って……まさか万太郎のアニキにも……挑戦状が？」
「何言ってんの」と万太郎。
「違うよ。凜子ちゃんからの、て・が・み！　キャッ！」
「……な～んだ……」
「なんだはないだろ。コレがまた、カワイイ丸文字なのよ！　……読んでみる？」
「いや、遠慮しとくだよ」



ウンザリしながら、セイウチンが断った。
「ワシ、漢字とか読めねェだから。アニキ、もう寝れば？」
「まぁまぁ、妬かない妬かない！　じゃ、ボクが読んであげるね」
アキレ顔のセイウチンを無視して、万太郎は手紙を読みあげ始めた。
「〝でぃあ万太郎〟あ、この〝でぃあ〟っていうのは英語なんだけど……
凜子ちゃんたら、それをヒラガナで書いてあんだよね。カワイイっしょ？」
「そうだか〜？　今どきダサくねェだか？」
「妬かない妬かない！　えーと、〝突然こんな手紙を出してゴメンねっ！　ペロ〟
あ、この〝ペロ〟っていうのは、ホントは舌の絵が書いてあるんだけど……
それを一応、〝ペロ〟って表現してみました」
「そんなのはえぇだよ！」
「続きを読みまーす！
〝凜子は最近……万太郎のことが、気になって、気になって、気になって、気になって、
気になって〟あ、これは、読み間違いじゃなくて、〝気になって〟のあとに×5って書いてあんだよね。

で、かけてみました」

「かけなくてえぇだよ！　もうアニキ、頼みますから寝てくんろッ！」

「またァ〜。ホントは聞きたいクセに無理しちゃってぇ！

でね、でね、その続きはね……」

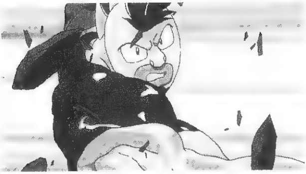
──ノーテンキな万太郎のノロケは、果てしなく続いた。

彼にとって日本への旅は……

犯人を捜すことよりも、凜子との再会に比重が置かれているようだった。

だが。

万太郎自身に降りかかることとなる悲劇と災厄（さいやく）は、もう目前に近付いていた。



5

夜の帳（とばり）が下りた、黒い森の〝ナチスの地上絵〟で。

ジェイドはまず、切り株の上に丁寧（ていねい）に畳（たた）まれてある、ブロッケンJr.のコートを発見した。

（師匠（レーラア）は――いったい何処（どこ）に？）

コートを片手に、なおも懐中電灯の明かりを、辺（あた）りにめぐらせると……

瞬間、見慣れたブーツと帽子が、視界に入ったような気がした。

（錯覚か）

とジェイドは思った。

なぜなら、ブーツと帽子は……それぞれ別々に、全（まった）く違う方向で目に映ったからである。

だが、次の瞬間。

（――まさか）

恐ろしい予感が、稲妻（いなずま）のようにジェイドの脳裏（のうり）を貫（つらぬ）いた。

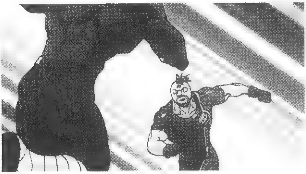
錆（さ）びた鉄のようなヘモグロビンの匂（にお）いが、かすかに鼻をつく。

その匂いは、残酷なまでに——この地の赤茶けた風景に似合っていた。
彼は、狂ったように帽子の方向へと走り寄った……
すると、そこには。
帽子を被ったままの——伝説超人・ブロッケンJr.の生首が、転がっていた。

「レ……師匠〜！」

輪切りにされたブロッケンJr.の体は、四方八方に、ぞんざいに散らばっていた。
それは、明らかに——
彼自身の必殺技〝ベルリンの赤い雨〟を、まともに受けたことを示していた。

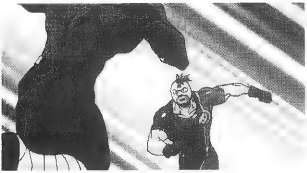
「師匠！　師匠！　師匠！　師匠〜！」
黒い森に、ジェイドの悲痛な叫び声がこだまする。
そして——そのポケットから。
もはや食べる者のないライ・ブレッドが、ぽろりと、転げ落ちた。



6

夜である。
月にかかる薄かった雲が突如かき曇り、雷鳴が遠くで轟いた。
地球か。
あるいは、他の星なのか。
荒涼たる砂漠の地に――何十年ぶりかの雨が降り始めた。
男は、それを気に止める様子もなく……
ただひたすら、〝強敵〟を求めて、彷徨い続けていた。
今から10年前、8歳の時。
厳格な父親に反発して、彼が家を飛び出した日も、雨が降りしきっていた。
男は、その幼き日のことを想い出したか、どうか。
素顔は鋼のマスクに隠されていて、感情を推し量ることはできない。
だが、無数の傷跡が残るそのマスクは……

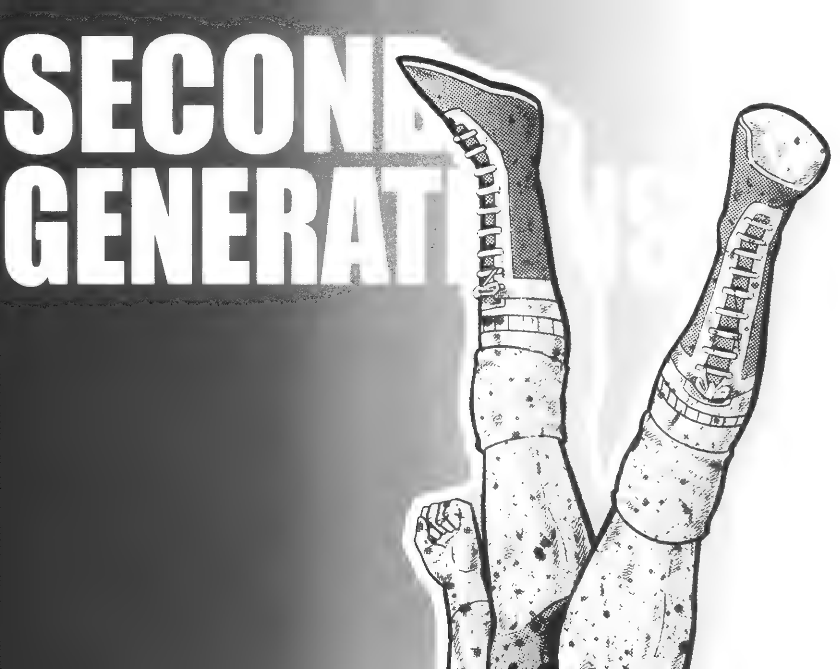
男が尋常ならざる死闘の日々を送ってきたことを、雄弁に物語っていた。
闘いに理念など、必要ない。
正義も悪も、ない。
リングもルールも、もちろん必要ない。
あるのはただ、勝者となるか、敗者となるかの〝結果〟だけだ――
それが、彼の信条だった。
強いと言われている者。
強さを、誇っている者。
そんな奴らをストリートファイトで叩きのめすのが、彼にとっては、何よりの快感だった。
ぶるっ――と突然、男の体が震える。
雨で体が冷えたせいではない。
肉体が、闘いを欲しているのだ。
もはや彼は――
仕事中毒（ワーカホリック）ならぬ、〝死闘中毒（バトルホリック）〟に罹患していたのかもしれなかった。



と、その時。
小さな丘陵の向こうから……ゆらりと、別の男の影が現れた。
稲妻が光り——瞬間、ふたりの顔を同時に照らし出す。
土砂降りの雨の中。
鋼のマスクを付けたふたりは——合わせ鏡のように対峙した。
「ケビン。久しぶりだな——捜したぞ」
と、父・ロビンマスクは、息子・ケビンマスクに向かって静かに言った。

SECOND GENERATIONS




SECON
GENERAT

第二章　悲愴！　永遠荒馬手吏男(テリーマン)居士

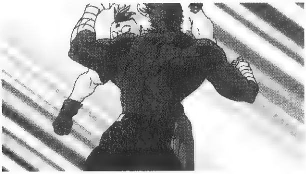




1

広大な大地とペカンの木立が広がる、アメリカ・テキサス州の西部。
人を拒(こば)むこの土地は、夏は暑く乾燥し、冬は気温が恐ろしく下がる。
平坦(へいたん)で殺風景(さっぷうけい)な地平の、そこかしこに……
お互い何マイルも離れた家々が、まるで天から降ってきたかのように、ぽつりぽつりと点在している。
そして。
キッドの父親・テリーマンの家もまた――
なにもない土地の真ん中に、ぽつんとひとつきり、建っていた。
キッドの祖父・テリーマン・シニアの時代に建てられた、古いながらも心休まる、懐(なつ)かしの故郷の家だ。
だがキッドには、感傷にふける余裕などない。
息を切らしながらドアをバーンと開け、

「パパー！　パパ〜！」と家の中に飛び込んだ。
「まァ、どうしたのキッド……そんなに慌てて」
居間の暖炉の前では、母親のナツコがひとり、編み物をしている。
「ママ！——パパは？　どこにいるの？」
「いきなりどうしたの」とナツコが微笑む。
「久しぶりに帰ってきたと思ったら、いきなりパパ、パパって……もうパパに甘える年じゃないでしょ？」
「いいからさ、教えてよ！　パパはどこに行ったんだよ⁉」
「まぁ怖い」
ナツコは編み物の手を止めて、
「パパは、格闘技学校の特別講師として招かれて、アラバマに行ってるわ——しばらくは帰ってこないわよ」
「——そうか」
キッドはホッとしながら、長旅で疲れた体をソファに沈めた。



「コーヒーを淹れるわね、キッド」と、ナツコがキッチンに立つ。
「サンキュー、ママ……」

キッドは、久しぶりの実家の丸太の匂いに身を委ねて——そっと目を閉じた。
響く音といえば、コーヒーをたてる音と……
時折猛スピードで走りすぎるトラックの、〝びゅっ〟という音だけだ。
他の土地の者たちはみな、「なんて寂しいところなんだろう」と言う。
でも。
キッドは、この殺風景な土地の空気が、大好きだった。
テキサスとは、男が男らしさを示さなくてはならない場所だ。
昔から、ベースボールよりも、アメフトや格闘技のほうが人気がある土地柄である。
誰が最初に言ったのか——こんな言葉も残っている。
〈テキサス人は、何がなんでも、敵に勝たなければいけない〉
この言葉のひそみに倣うなら……
どちらかといえば、父親のテリーマンよりもキッドのほうが、生粋のテキサス人なのか

もしれなかった。

幼い頃から今に至るまで、キッドは——

〝友情のためには、ときには勝利をも捨てることもある〟という父親の考え方が、どうしても理解できなかった。

暖炉の上の棚には、昔と変わらず、テリーマンが獲得したトロフィーの数々が置かれてある。

キッドは思わず苦笑いした。

（そういえば、このことで……パパに噛み付いたことがあったっけ）

父親・テリーマンと交わした会話の、遠い日の記憶。

『……ねぇ。パパはとっても強い超人レスラーなんでしょ？
なのに、どうしてちっちゃなトロフィーやカップしか貰ってないの？』

『大きなトロフィーやカップは、パパの友達のキン肉マンが、いっぱい貰ってるよ』



『――パパは、大きなのが欲しくないの？』

『パパはね』

と父親は、にっこりと微笑みながら言ったものだった。

『自分が大きなトロフィーを貰うより……

キン肉マンがそれを貰うほうが、嬉しかったんだよ。

男には、そういうこともあるんだ――わかるね、キッド』

『そ……そんなのわかんないよ！』

『キッド……？』

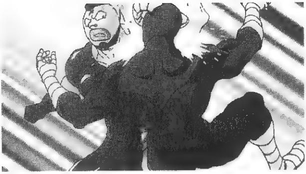
生まれて初めて父親に逆らった、あの日。

父親の顔には、名状しがたい、寂しそうな陰が兆したものだった。

（あの時は、悪いこと言っちゃったかな。でも、パパ――）とキッドはつぶやいた。
（やっぱり闘いは、勝たなきゃ意味がないよ）

父親と息子の、闘いに対する意識のずれは――キッドの心の中で、伝説超人世代全体への反発心にも繋がっていた。
宇宙捜査会議の時、キッドが、ロビンマスクに食ってかかったのも……
あるいは、その思いの表れだったのかもしれなかった。

キッドはまた、暖炉の上の棚に、ふと目をやった
すると――妙なことに気がついた。
〝そこにあるべきはずのもの〟が、なくなっていたのだ。
「――ねえ、ママ」
また編み物を始めたナツコに向かって問い掛ける。
「確かあそこ……僕ら家族の、写真立てが飾ってあった筈だよね。
どこにやっちゃったの？」



「――」
ナツコは、黙ったままだ。
その肩は、小刻みに震えている……
その瞬間。
キッドの脳裏に、恐ろしい〝理由〟がよぎった。
「――ママ。嘘をついたね」
キッドは、ソファから立ち上がりながら言った。
「パパは、闘いに出かけたんだろう！　僕らの写真を持って!!」
「キッド！……」
耐え切れず、ナツコは泣き始めた。
「ごめん……ごめんね、キッド！　でもパパが……パパが！　……」
「時間がないんだよ、ママ！　いったい何があったのさ？」
「2日前の夜……パパとあなた宛てに、挑戦状が届いたの」
ナツコは、泣きじゃくりながら言った。
「パパは言ったわ……〝俺ひとりで行って来る。もしキッドが帰ってきても、絶対に知ら

せるな〟って……」

「——!!」

キッドの鼻の奥に、つんと苦いものがこみ上げた。

(まさか……まさか!)

動悸(どうき)が激しく胸を打つ。

(落ち着け、落ち着くんだ、キッド。まだ、パパがやられると決まったわけじゃない)

ひとつ息をついて、

「ママ——場所はどこだ」

聞くが早いが、キッドは家を飛び出した。



2

「ハイヤー！」

キッドは、愛馬のスレーターにまたがって、〝闘技場（コロシアム）〟への道を、駆けに駆けた。

スレーターも緊急事態を察しているのだろうか。

ムチを入れずとも、物凄（ものすご）いスピードだ。

（お願いだ、パパ！　――無事でいてくれ！）

〝闘技場（コロシアム）〟とは、家から10マイルほど離れたところにある、テリーマン一族の鍛錬（たんれん）の場だ。

車では入ることのできないペカンの林の獣道（けものみち）を抜けると――

突然、直径0・5マイル（約800m）ほどの、霧に包まれた、スリ鉢（ばち）状の地形に辿（たど）り付く。

そこだけ木々は全（まった）く生えておらず、円形の荒地が剝（む）き出しになっている。

古代ローマの闘技場さながらの、不思議な地形――

それは、地元の考古学者にさえ知られていない、隕石孔なのだった。
テリーマン一族は、代々、ここを実戦練習の総仕上げの場として、秘密裡に利用していた。
この地を年中覆っている深い霧が、敵の殺気を鋭敏に察知する鍛錬に、何より役立つのである。
荒地のそこかしこには、一族の男たち全員の血の痕が、はっきりと残っている。
クリーンファイトで鳴らしてきた、テリーマン一族——
だがその陰には、血で彩られた凄惨な修行の歴史があったのだ。

キッドは、父親の決闘の地——この〝闘技場〟に馬を乗り入れ、中心地点に向かって、死に物狂いで駆けドりた。
「パパー！　ハパー！」
深い霧の中、中心地点は全く見えない。
だが、その代わりに——古い血の痕とは明らかに違う——まだ新しい血痕の黒茶けた色が、残酷にキッドの目を刺した。



「パパー！」
キッドがようやく中心地点へと辿(たど)り着いた、その瞬間。
かつて一度も晴れたことのない霧が、ぱっと晴れた。
そして、そこには――
座り込んだまま息絶えている、父親・テリーマンの亡骸(なきがら)があった。

「パ……パパ……」
キッドは、その場にへたり込んだ。
砕(くだ)かれた顔面は、「仔牛の焼印押し(カーフ・ブランディング)」を食(く)ったのだろうか。
折れ曲がった両膝(ひざ)は、「回転足首固め(スピニング・トウ・ホールド)」と「四つ葉固め(テキサス・クローバー・ホールド)」のせいか。
まるで真綿で締め上げるように――徐々に殺されていったのだろう。
後ろからやってきた、馬のスレーターが「ひひん」と哀(かな)しそうに、嘶(いなな)いた。
「パパ……痛かった？　苦しかった？」

キッドは、亡骸に向かって——まるで子供に話すかのように、問い掛けた。
ふと、父親の垂(た)れ下がった右手の下を見ると……
地面に、なにか文字が、書き記されてある。
死の直前に、最後の力を振り絞って書いた文字だろうか。
そこには、こう書かれてあった。
「キッド。強くなれ(ビー・ストロング)」
それを見て。
キッドは声をあげて、泣き始めた。

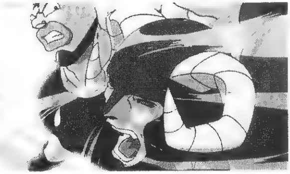


3

テリーマンとキッド宛(あ)てに、「連名」で挑戦状が届いていたということは――
〝影〟の魔の手が、伝説超人(レジェンド)のみならず、新世代超人(ニュージェネレーション)たちにも及んできたことを示していた。
だが、宇宙連絡船の中の万太郎(まんたろう)は、そんなことを知るよしもない。
操縦をセイウチンに任せ、自分はベッドで高イビキである。
「ムニャムニャ……凛子(りんこ)ちゃわぁ～ん！」

一方、コックピットではセイウチンが、
「ったく万太郎のアニキったら……デートのことしかアタマにねェんだから」と、
ひとり愚痴(ぐち)をこぼしていた。
「よし、これであとはオート軌道進入ナビにまかせて、と。
ワシもちょっくら寝でおごうかな……」

――その時。
セイウチンの背後で、何者かが動く気配がした。
「……ん？　アニキ、起きただか？」
振り向こうとするセイウチン――その首に、〝誰か〟の手が巻きついた！
チョーク・スリーパーだ！
「――誰だ！　グ……グエッ！」
さすがのセイウチンも、後ろをとられてはひとたまりもない。
薄れていく意識の中で――
スリーパーからの脱出方法が、セイウチンの脳裏を駆け巡った。
彼は、ことグラウンドでなら、六通りもの脱出法を会得していた。
だが、狭いコックピットの中では、使える方法はただひとつに過ぎない。
セイウチンは、自らのキバを敵の腕に食い込ませようと、最後の抵抗を試みた……
だが、ますます首は絞まっていく一方だ。
（ち……畜生!!）
超人とはいえ、最後の最後には本能が働くものだ。



セイウチンは、無理にクビをねじ曲げ、敵の顔を窺おうとした……
その刹那。
窓の外の彗星の光が――一瞬、相手の顔を照らし出した！
「あっ！　……き、貴様!?　……」

4

空吹(からぶ)きしているアフターバーナーの音で——ようやく万太郎(まんたろう)は、目が覚めた。
「ファ～ア、よく寝たぁ！」
すでに連絡船は地球に到着しているらしく、動いている様子はない。
「なんだよセイウチン……着いたんなら、起こしてくれたっていいじゃん！」
ブツブツ言いながら、万太郎はコックピットに移動して、
「おい、セイウチンったら」——と、その物言わぬ肩に手をかけた。
「——!!!　セ、セイウチン！」
すでに冷たくなっている、セイウチンの亡骸(なきがら)。
その表情は、〝敵〟の顔を見た驚愕(きょうがく)のまま、凍(こお)り付いていた。
「い、いったいこれは……!?」
と、次の瞬間！
万太郎の頭部に、衝撃(しょうげき)が走った！



「ウグッ！ ……だ、誰だ！ ……」
万太郎は意識を失い、その場に昏倒した。



5

薄暗い、病院の一室で——万太郎は、ゆっくりと目を開いた。

(なんだ……夢だったのか)

と、一瞬、思った。

意識が混濁していて、まだ連絡船のベッドの中にいるような気がしたのだった。

だが……割れるような頭の痛さに、すぐに現実に引き戻される。

(やっぱりあれは、本当にあったことだったんだ! ……

セ、セイウチンが、殺されたっ! ……)

慌てて起き上がろうとして——

ベッドの周りを囲む、キッドとジェイドの姿に気がついた。

キッドが、なぜか無表情のまま……静かに口を開く。

「よかった。気がついたか、万太郎」

「……キッド! ……ジェイド! ……」



「3日間も昏睡(こんすい)してたからな。このまま、死んじまうのかと思ったよ」と言うジェイドも

――なぜか張り付いたような無表情のままだ。

「フン」とキッドが、冷ややかな笑みを漏(も)らす。

「このまま死なれちゃ、かなわんよ――俺の手で、コイツ(万太郎)を殺すつもりだからな」

瞬間。

不気味な沈黙(ちんもく)が、病室の中を支配した。

万太郎は、耳を疑った。

「え……? 今、なんて言ったんだ、キッド?」

「まさかな、万太郎……貴様(ユー)が犯人だとは思わなかったよ」

「な、なんだって!?」

「これが何よりの証拠だ!」

キッドが投げつけたなにやら小さな機械が――病室の床に転がった。

それは、万太郎とセイウチンが乗っていた宇宙連絡船の、音響保護装置(ボイスレコーダー)だった。

ジェイドが拾い上げ、スイッチを入れる――すると。

いまわの際にセイウチンが発した言葉が、病室の中に流れ始めた。

『**アッ！　……キ、キサマ!?　……ソノ、ヒタイのニクのモジは！　……グ、グエッ！**』

呆然とする万太郎――

「ボ、ボク知らないよ！　ボクだって誰かに殴られたんだ！」

「自分も被害者を装うなんて、古い手さ」とジェイドが言った。

「テメェでテメェの頭をブツけといて、3日間も昏睡か――ザマぁないぜ、万太郎」

「ひどいよジェイド！　他の奴の仕業だよ！」

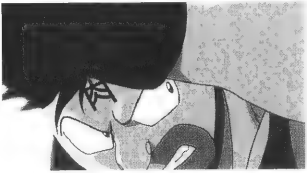
「いいか」とキッドが腰に手を当てたまま、冷たい目で万太郎を見下ろした。

「あの連絡船は、貴様とセイウチンのふたりで重量オーバーギリギリだった。他に誰が乗れたって言うんだ？」

「だから知らないってば!!」

その瞬間……万太郎のヒタイに、うっすらと〃肉〃の文字が浮かび上がった。

「それだ。激情にかられると、貴様の額には、キン肉族の証である肉の紋章が浮かび上が



る……セイウチンは、それを見たんだ」
「キッド！　……ボクが信じられないのか？」
「じゃあ聞こうか。宇宙捜査会議の前——貴様(ユー)、しばらく行方(ゆくえ)がわからなかったそうじゃないか。いったい何処(どこ)にいたんだ？」
「そ、それは……」万太郎は、思わず言葉に詰まった。
とても〝凜子(りんこ)や他の女の子たちと毎日遊び呆(ほう)けていた〟と言えるような雰囲気(ふんいき)ではない。
「貴様(ユー)は……」キッドの目に、涙が滲(にじ)む。
「貴様(ユー)は、僕のパパとブロッケンJr.を殺してから——
平然とした顔で会議に出たんだ!!」
「え！　……テ、テリーマンとブロッケンJr.も、死んだのか!?　……」
「とぼけるのもいいかげんにしろ！　往生際(おうじょうぎわ)が悪いぞ万太郎！」とジェイド。
そして——キッドが静かに言い放った。
「キン肉万太郎。パパの仇(かたき)だ——俺は、お前を殺す(アイ・ジャスト・キル・ユー)」
そして、ジェイドも言った。
「師匠(レーラァ)の仇だ。キッド、俺に殺(や)らせてくれないか——」

と、その時。

ドアが突然開いて――スグル大王が、姿を現した。

「キッドよ、ジェイドよ……ちょっと待ってくれないか」

「父上！」

父親が助命に来てくれたと思い、万太郎はホッとした。

だが……スグル大王は、万太郎を見ようともせずに続けた。

「お前たちの気持ちはよくわかる。

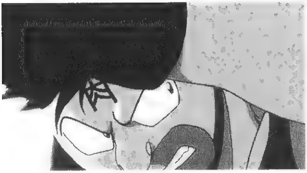
だが……悲しんでいるのは、この私も一緒だということもわかって欲しい。

苦楽を共(とも)にした伝説超人(レジェンド)たちが、櫛(くし)の歯を削(けず)るように、死んでいってしまった……

かくなる上は、ワシ自らの手で、万太郎に鉄槌(てっつい)を与えたい」

「……父上？」

「息子よ、ワシと闘え。私が、お前を殺す！」



6

――その頃。

ミートは、土星の衛星・タイタンの、とある洞穴の中で――後ろ手に縛られたまま、もがいていた。

〝影〟に捕まり、捕らわれの身となってしまっていたのである。

夜ともなれば、絶対零度に限りなく近付くタイタンの気温。

人間ならば、とうに凍死していたに違いない。

だが、そこはミートとて、超人のはしくれである。

〝影〟の前では、わざと体温を下げ、仮死状態を装っていたのだ。

(逃げ出すなら、今しかない)

〝影〟が洞穴から出て行っている隙に……

ミートは、凍りついた指で、ゆるみ始めた縄目を必死に解こうとしていた。

意識は薄れ……すでに指先は凍傷で壊死し始めている。

（クソッ――もう少しだ！　早く逃げないと……あいつらが、戻ってきちゃう！）
その時。
吹き込んでくる、窒素（ちっそ）とメタンの風と共に……
洞穴の入り口に、ふたつの大きな影が現れた。
（しまった！　間に合わなかったか――）

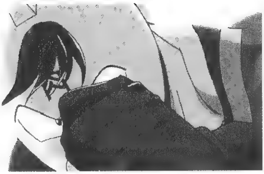
ミートに無言のまま近付いてくる、ふたつの大きな影――
それは。
ロビンマスクと、ケビンマスクの親子であった。




SECOND
GENERATION

終章　慟哭(どうこく)！　火事場剛力筋肉男(キン肉マン)居士





―

一週間が過ぎた。

万太郎の回復を待って行われることとなった、前代未聞の親子の闘い――

「初代キン肉マンVSキン肉マンII世」の試合は、もう明日に迫っている。

だが万太郎は、頭の傷はほとんど癒えたにもかかわらず、いまだ病室のベッドの上で、グズグズとグズっていた。

「万太郎。氷まくら、替えようか?」

「ありがとう、凜子ちゃん……」

(まさか凜子ちゃんと、こんな形で再会することになるなんて)

そう思うと、万太郎は泣きそうになった。

「――ねぇ、凜子ちゃん」

「なぁに？　……あ、動かないの。氷がこぼれちゃうじゃんか」
「──親子の絆って、なんだろう」
「フフ。突然なに言ってんの」
「だってボク……何もやってないんだよ!?　それなのに父上ったら！　……
ボク……ボク、父上と闘うのなんてヤダよ！
父上がボクのこと信じてくれないんなら……
いったい誰が信じてくれるっていうんだ!?」
「元気出しなよ、万太郎──あたしがいるじゃない」

そこへドアが開いて──
「信じていいヤツが、ここにもうひとりいますよ」と声がした。
「──ミート！」
「お久しぶりですII世！　って、ハイそこ、泣かない！」
「ぐっすん……ごめんよぉ」と涙を拭いて、
「ミートぉ！　今までどうしてたんだよぉ？」



「ケビンとロビンの行方を追っていたら、逆に奴らに捕まっちゃいましてね——
恥ずかしい限りです。
なんとか、逃げのびてきましたけど」
見ると、両の腕が、包帯でグルグル巻きにされている。
「その腕は……いったい？」
「タイタンで凍傷にやられちゃったんですよ。ま、たいしたこたァありません——こう見えてもボクだって、超人ですからねッ！」と言いながら腕をグルグル回して、
「い、イテテッ！」
「おいおい、無理すんなよミート！」
「大丈夫です。それよりII世——」と言葉を繋ぐ。
「やはり犯人は、ケビンマスクですよ」
「な、なんだって？」
「ヤツは、もう以前のケビンじゃない。死闘中毒になってましてね……
数々の星のツワモノどもを相手に、片っ端から闘いを挑む行脚を続けてたんです。
ま、ここからは想像の域を出ませんが——

遂にはそれに飽き足らなくなって、伝説超人たちを手にかけ始めたんですよ」
「あのケビンが……か……」
「彼だけじゃない、息子の犯行に気付いて追いかけたロビンマスクも、恐らくなんらかの形で、その後の事件に関与しているはずです。
じゃなきゃ、ボクを拉致する理由がないでしょう」
「――――」
「信じたくない気持ちはわかります。ま、証拠はまだありませんがね」
「でも」と万太郎は言った。
「そんなこと言っても、誰も信じちゃくれないよ！
みんなボクが犯人だと思い込んでるんだ！
父上との試合だって……今さら逃げるわけにいかないよ！」
「だからII世。逆に明日の試合こそが、無実を証明するチャンスなんじゃないですか」
「……チャンス？」
「まだわかりませんか。ケビンらにとって、これほど恰好の舞台はないでしょう――
満座の前で〝初代キン肉マンあるいはII世を殺す〟という、残酷ショーのね」



「――!!」
「もちろん、ヤツらの好きにはさせませんよ」
彼は、ニッコリと笑っていった。
「このミート……一計を案じてあります」

2

宇宙(そら)の虚空(こくう)に浮かぶ、〝レジェンド・タマネギ・アリーナ〟。
ここは、日本武道館をモチーフにした伝説(レジェンド)超人たちの闘いの殿堂である。
「初代キン肉マンVS(バーサス)キン肉マンII世」の闘いを直前に控え、50万人を収容できるこのアリーナは、すでにフルハウスの大観衆で埋め尽くされていた。
アリーナ前の宇宙港(スペースポート)のあちこちでは、ダフ屋のオヤジと客とのイザコザが同時多発している。
「チケットないよ〜チケットないよ〜。ある人買うよ〜」

「ないんかい！」

――観衆とは、常に残酷なものだ。

宇宙を揺るがす大事件にまで発展した、こたびの〝超人連続殺人〟。

その〝犯人〟に父親自身が制裁を加えるというサブ・ストーリーに、人々が熱狂するのも無理はなかった。

だが――

ドレッシング・ルームの万太郎は、憤慨することしきりである。

「なぁ、ミート。どうして父上は、今日の闘いを公開することにしたんだろう？　これじゃまるで、見世物じゃないか！」

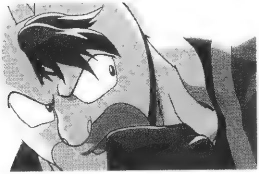
「そうですよね。まァあの方なりの深い考えが、あってのことでしょうけど――」

「ないよそんなもん、あのオヤジに！

チキショ〜、きっとボクを大勢の前で叩きのめして、高笑いするつもりなんだ！」

「まさかそんなことは……」

「フォローはいいよミート。こうなったらボクも――本気の本気でやってやる！」



万太郎がそう言った瞬間。
その額に〝肉〟の文字が、ボッと浮かび上がった。

一方。父親・キン肉スグルのドレッシング・ルームでは——
報道陣を一切シャットアウトした中、スグルがただひとり、ひたすらアップを続けていた。
「フン！　フン！　フン！　フン！」
サウナスーツをまとった肉体から、蒸発した汗の湯気が立ち昇る。
鬼気迫ったスグルの表情——
そのマスクの奥に隠された想いを窺い知ることはできない。
そして。試合開始のときが、やってきた。

3

時計の針が、宇宙標準時間の金曜午後八時を指した、その瞬間。
入場ゲートからリングへと続く花道に立つリングアナの声が、アリーナに響き渡った。

『レディース・アンド・ジェントルマン！　イ〜ッツァ、ショウタァアイム！』

どーっ、という地鳴りのような歓声。
客が床を踏み鳴らす、重低音ストンピング。
立錐の余地もなく10階席まで埋め尽くされた、すり鉢状のアリーナの熱気は、すでに沸点にまで達している。
アナウンサーも、早くも興奮の極みである。

『さぁ、遂に〝その時〟がやってまいりました！
伝説超人連続殺人事件に端を発した、掟破りの父と子の対決——



初代キン肉マンVS（バーサス）キン肉マンII世！　世紀の一戦がその幕を開けんとしております！
実況は私、〝今日もお通（つう）じブリッと一発〟御通痔（おつうじ）ヨシナリ！
そして解説は、先日・父親のテリーマンを殺されたばかりのこの方！
テリー・ザ・キッ……い、イテッ！　あ、あんた、なにも殴（なぐ）んなくても。あ、鼻血が』
「余計なこと言わないでいいんだよ。ブチ殺すぞ、貴様（きさま）——」
『し、失礼いたしましたっ。さて、キッドさん……本日の試合のみどころなんですが？』
「みどころもへったくれもねぇ。大王がもしやられたら、俺が飛び込んでいって万太郎を殺す——それだけさ」
『オイ誰だ、こんな物騒なヤツを解説に呼んだのは！　い、イテッ！　あ、また鼻血が。
……え～、とにもかくにも、実況ブースのほうも早くも波乱含みでありますっ！
さぁそれでは！　まずは皆様に——

決戦の舞台となります特設リングを、ご覧いただきましょう！』

アリーナの中心では、特別にあつらえられた巨大な〝キン肉マンマスク〟が、謎の特設リングを覆っていた。

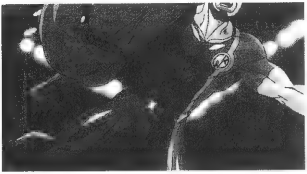
その巨大マスクが、まるで除幕式のように、パッと脱げ落ちる。

するとそこに——天井近くにまで聳え立つ、正十六角柱の——不気味な金網のリングが、その威容を現した。

『出たァ〜！　これが今宵の決戦の場となります特設リング！
その名も〝ロックトルーム・ダブルオクタゴン〟だァ〜！』

場内に、どよめき声と悲鳴があがる！

『上から見ますれば正十六角形、殺されていった超人たちの数に彩られました、こちらの



リング！

通常、バーリ・トゥードで使用される金網リング〝オクタゴン〟は……周りこそグルリと金網で囲まれているものの、上部はポッカリと開いております。

理由は外でもありません、そう！

〝不測の事態〟が起こった際、脱出及び救出を、可能たらしめるためであります！

ところが、この〝ロックトルーム・ダブルオクタゴン〟は――

周囲は言うに及ばず、天井部分までもが、〝完全に〟金網に覆われているのであります！

両雄のリングインと同時に、扉は外からバーナーでしっかりと閉じられます！

レフェリーもいません、反則チェックもありません！

そしてルールはただひとつ！

〝勝敗はどちらかの死をもって決する〟――

キン肉スグル選手の強い要望により、この文字通りの完全デスマッチルールが適用されたのであります！

前代未聞、まごうことなき〝密室（ロックトルーム）〟の死闘！

まずは両雄の入場です！』

4

対角に設けられた、ふたつの入場ゲートに花火が上がり——
後ろから逆光を浴びながら、まずは初代キン肉マン・キン肉スグルが登場。
続いて、キン肉マンII世・キン肉万太郎が、その姿を現した。
スグル大王は、キン肉王家ゆかりの、色褪せた金色のガウンを羽織っている。
一方万太郎は、ボディスーツのみというシンプルなコスチュームだ。
無言のまま、金網のリングへと続く花道をゆくふたり……
その入場に、いつもの〝華〟は微塵もない。
大歓声と怒号、罵声が飛び交い、アリーナは興奮の坩堝と化す。
だが——ふたりの入場を間近で見た最前列の観客たちは、皆一様に、押し黙ってしまった。
スグルと万太郎が、いつものアホアホな入場シーンを見せなかったせいで、白けたから



ではない。

〝親子で殺しあう〟という闘いの哀しさが――

ふたりの表情から、彼らに伝播したからだった。

(万太郎はパパの仇だ。

ヤツの父親自らが死の制裁を下すことに、反対する理由はない――でも)

解説席のキッドは改めて自問自答した。

(俺は本当に、こんな闘いを見たいのだろうか？)

そして。

リングサイドに陣取っているジェイドの胸には、もっと根本的な疑念が兆し始めていた。

(確かに、万太郎に不利な証拠は出揃ってる。でも、もしも)

ジェイドは、その考えに戦慄した。

(もしもヤツが犯人じゃなかったとしたら？)

『――さぁ、キン肉スグルに続き……今、万太郎選手が、リングイン！
これからバーナーにより、扉が閉ざされてまいります！
皆様、しばしお待ちあれッ！』

バーナーの炎が、ごーっと音を立て、鉄の扉を溶接していく。
だが万太郎は、その炎とは裏腹に、急速に戦意の炎が萎んでいくのを感じていた。
ドレッシング・ルームでは、無理矢理、自らを鼓舞していたものの――
父親の顔を間近で見ると、やはり、本気で向かっていく気はしなかった。
父・キン肉スグルの方はと言えば――
対角コーナーに立ち、早くもガウンを脱ぎ始めている。
その佇まいは、どう見ても真剣に臨戦態勢に入っているとしか見えない。
と――ガウンを脱いだスグル大王の体を見て、リングサイドが一斉にどよめいた！
万太郎も思わず息を呑む！
(な、なんだ、あの体は！　昔の写真と――ほとんど変わらないじゃないか！)
隆々と盛り上がった筋肉に、割れた腹――



さすがに肌艶の年齢は隠せないものの……その肉体には、〝全盛期〟を彷彿とさせるに充分な迫力が溢れていた。
伝説超人の頂点に立った男のプライドだろうか。
今夜の闘いに備え、わずか一週間の間に、ここまで仕上げてきたのである。
だが。
万太郎の戦意は、逆にますます萎む一方だった。
（父上――ボクを殺すために、そこまで？）
戦意よりも、哀しみのほうが胸を突き上げる。
「ねぇミート、凜子ちゃん――」
万太郎は鉄格子越しに、外のセコンドふたりに向かって話しかけた。
ほかの新世代超人たちが揃ってスグル大王のセコンドについているのとは対照的に、万太郎のセコンドに付いたのは、わずかにこのふたりだけだった。
「――ケビンたちは、まだ来てない？」
場内に目を凝らすセコンドのふたり。だが……
「どうやらアリーナ席にはいないようですね」

「そうね。ひょっとしたらもっと上の階の客の中にまぎれ込んでいるかもしれないけど――ちょっと、ここからは見えないな」

「やだなァ」と万太郎がじれるように言った。

「どうせ現れるんなら、さっさと現れて欲しいよ！　ボク、やっぱり父上と闘うのなんて絶対やだよ！　しかもこんな、棺桶みたいなリングで――」

「ちょっと待ってくださいII世」

　いたずらっぽい笑みを浮かべながら、

「実はね――このリングを用意したのはボクなんですよ」

「な、なんだってぇ！　こ、こんな物騒なリングを……お前が作ったぁ？」

　万太郎がわめいた。

「ど、どういうつもりだよミート！」

「だから言ったでしょう？　〝このミート、一計を案じてある〟ってね。まぁ怒らずに、ワケを聞いてくださいよ。どうしてボクが、こんなリングを作ったか」

「……なぜだ？」

「天井まで金網で覆われたリングというのは、当然、〝外には逃げられない〟――でも同



時に」

ニヤリと笑って、

「〝絶対に外から中にも入ることはできない〟んです」

「そうか！　――」

「お気付きですか。

つまりこの会場では……実は、金網の中が一番安全ってことなんです！

II世――ケビンとロビンが現れるまで、なんとしても頑張ってスグル大王の攻撃に耐えてください！　その上で、果たしてふたりがどんな形で襲ってくるのか――

お手並み拝見といきましょうよ」

『――さぁ、今ガッチリと鉄の扉が閉ざされました！　いよいよゴングです！』

息を呑んで見つめる大観衆。

解説席のキッド。

リングサイドのジェイド。

万太郎に情け容赦のない罵声を浴びせる、他の亡き伝説超人たちの遺族たち。
そして、ただ下を俯き、泣き続けている万太郎の母親・ビビンバ。
人々の様々な想いが交錯する中——
哀しいほどに澄み切ったゴングの音色が、アリーナに響き渡った。





5

アリーナの天井から降り注ぐ、まばゆいばかりのライトのもと……

親子は時計回りに回りながら、視線をぶつけ合った。

「いくぞ、父上！」

「かかってきなさい――万太郎！」

――ガチッ。

試合は、両者が手四つで組み合うクラシカルな展開で始まった。

（この力の入れ具合は……？）

まず万太郎は、父親が〝本気〟なのかどうかを、推し量ろうとした。

『さぁ、遂に激突した父親と息子！　初代とⅡ世！　ふたりのキン肉マン！』

闘いの焦点は、ただひとつ！
両雄が共に得意とする〝あの必殺技(フェイバリット・ホールド)〟を、どちらが先に炸裂(さくれつ)させるのか？——
この一点に絞られていると言っても過言ではありません！
空中への大ジャンプが必要とされるこの必殺技を考慮して……
金網の天井は、あらかじめ地上20メートルの高みに設定されております！』

——と、アナウンサーが叫ぶやいなや——
スグル大王が、万太郎のバックにスルリと回り込んだ。
（——しまったッ）
と万太郎が思う間もなく！
さらにスグル大王は、万太郎の頭を背後から左腕でガッチリと捕獲して——
同時に自(みずか)らの頭を、万太郎の左肩下にもぐり込ませた！
『あッ、あーッ！　この技の入り方は……もしや！』



キッドも思わず椅子から腰を浮かせる！

「いきなりか！——」

スグル大王は、万太郎の体をまっさかさまに肩の上に高くさし上げ、さらに両の内腿をロック！

その体勢のまま——上空へと、鷹の如く舞い上がった！

『の、のっけから出たァ～！　キン肉族48の殺人技、その頂点に君臨する〝五所蹂躙絡み〟！　またの名を——』

——ドーンとリングに落下するスグル大王！

その肩の上で、万太郎の首がぐにゃりと曲がる！

『キン肉バスター!!!!』

瞬間、アリーナ全体が衝撃に揺れた！

『い、いきなり飛び出した必殺技（フェイバリット・ホールド）！
手元の時計では、試合開始から、わずかに34秒であります！
さぁどうだ、もう終わりなのか!?　万太郎の息の根が止まったか～!?』

「——いや」とキッドが言った。

「左内腿のロックが甘かった。
キン肉バスターは、どこか一点でもロックが甘いと——その威力（いりょく）は半減する」

その言葉通り。万太郎は、フラフラになりながらも……ゆっくりと、立ち上がった！

『……大丈夫のようです！　万太郎、気力で立ち上がります！』

だがスグル大王は、攻撃の手を緩（ゆる）めない！
すぐさま万太郎を担ぎ上げ、再び大ジャンプ！



さらに空中で万太郎の両足首を摑み、頭を下にぶら下げる――

『さぁ、ジャンピング・パワーボムか？　い、いや違うぞ、これは！　――〝48の殺人技プラス1ッ〟』

一瞬ののち――ドカーン！　という衝撃音が、観客の耳をつんざいた。

それは。

スグル大王が、両足で万太郎の肩を押さえつけながら――マットに脳天から叩きつけた音であった。

『――キン肉ドライバー！！！
恐るべしは父親の鉄槌ッ！
な、なんとキン肉スグル、いきなり必殺技の波状攻撃だァ！
さすがにこれは決まったか～！　万太郎、ピクリとも致しませんッ！』

「いや、立つよ」とキッドが言った。

「今度は足の押さえが甘かった。やはりブランクは大きいな――あるいは年齢のせいか」

その予測通り……万太郎はまたしても、よろけながらも立ち上がる！

そして。

頭を押さえてコーナーに後ずさりしながら……一瞬前の記憶を振り返った。

（やられたと思った――でも、どちらの技もパーフェクトというには程遠かった）

万太郎の胸を、安堵と寂しさが、揃って去来した。

（父上……やはり老いたな。それじゃあ、ボクを倒すのは無理だよ）

と、次の瞬間。

射るような目線で万太郎の周囲を回っていたスグル大王が、タックルに来た！

油断していた万太郎はタックルを切れない。

あっさりテイクダウンを取られ――そのまま、マウント・ポジションを奪われた！

『……さァ今度はスグルがマウントを取ったぞ！

そして――ギロチン・チョークを狙うッ！　万太郎、大ピンチだ！』



馬乗りになられ、喉元に上腕部をギロチンの如くグイグイと押し込まれる万太郎！
顎を必死で引き、ギロチン・チョークから逃れようとして――
（あれっ）と思った。
首にのしかかっている父親の腕には、ほとんど力が入っていないではないか。
（やはり老いのせいか？　それとも――）
その時。
顔の真上から、父親の囁き声が、かすかに響いた。
「もっとうまく受け身を取らんか万太郎。下手したら大怪我するところじゃぞ」
「……え？」
「そのままで聞け、万太郎」
「――」
「お前はワシのことを、さぞやひどい父親だと思ったことじゃろう。じゃが」
とスグル大王は囁いた。
「今日の闘いを公開したのはじゃな……真犯人が現れやすいように、罠を仕掛けたかった

からなのじゃ」

万太郎は、涙がこぼれそうになった。

「父上！　やっぱりボクを信じててくれたんだね！」

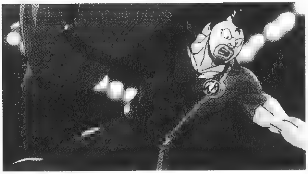
「シッ！　ギロチンをやられながら喋（しゃべ）るなと言うに！

ワシを囮（おとり）に仕掛けた、この罠――フフン、敵は見事に引っかかりおったわ」

スグル大王は、ニヤリと笑みを浮かべた。

「昨日、ワシのもとにも挑戦状が届いた。

今宵（こよい）、この場所で……ワシをキン肉バスターで殺すというんじゃ」



6

ギロチン・チョークの体勢のまま――口元をほとんど動かさずに、スグル大王は続けた。
「いいか息子よ、よく見ておけ。このアリーナのどこかに……ワシを殺すため、必ずや真犯人が現れるはずじゃ」

『おや⁉ どうやら万太郎の目に、涙が浮かんでいるようです！ ギロチンが効いておりますッ！』

「……ホレ、もっと苦しそうな顔をせんかい！」
「グ、グ、グエエエエ～！ ギヒャアアア～！ ゲロゲーロ」
「普通でよい普通で！ クサ過ぎるわ！」
スグル大王は、肘を痛めたフリをしてギロチン・チョークを外し――
横四方固めに移行しながら、囁いた。

「よいか。犯人がなんらかの動きを見せるまで……なんとしても試合を引っ張るのじゃぞ！　なぁに、ワシのスタミナのことなら心配はいらん」

スグル大王は、ひそかにウインクした。

「このために――ワシは体を作ったんじゃからの」

（父上！　……そうだったのか！）

万太郎も、ひそかに、目で頷（うなず）いた。

5分経過――

『……あ～ッと、ここで万太郎の大技が飛び出した！

ブレーン・バスターの原点！　フロントネック・チャンスリー・ドロップだァ～！』

そして10分経過――

『……両雄の大技の攻防に、アリーナ大観衆は総立ちでありますっ！



さぁスグル大王が〝吊(つ)り天井〟ロメロ・スペシャルの体勢に入ったぞ！
決まるか決まるか決まるか〜ッ？』

スグル大王と万太郎は、金網の外の様子に気を配りながら――〝熱闘〟を演じ続けた。
「どうじゃ万太郎？　怪しいヤツを見つけたか？　……」
「ううん……まだなんの動きもないようだけど……」

観衆の人いきれと大歓声で、アリーナの熱気は高まる一方である。
だが。
観客の目はごまかせても、リングサイドで見守っている超人たちを騙(だま)しおおせる筈(はず)もない。
（なんだこれは――偽闘(フェイク)じゃないか！）
解説席のキッドは、怒りにその身を震わせていた。
（確かに親子の殺し合いなど見たくはないが）とキッドがつぶやく。
（こんな意味のない偽闘(フェイク)なんて、もっと見たくないぞ！）

一方、リングサイドのジェイドの胸には、再び万太郎への疑惑が頭をもたげ始めていた。
(親子でつるんで、こんな茶番を見せるということは——やはり万太郎が犯人ということか。フン、まぁいい)
ジェイドは笑みさえ浮かべながら、腕を組んで座りなおした。
(このクソ試合が終わった後……俺の手で万太郎を殺せばいいだけの話だ。見ててくれ、師匠(レーラア))

『……おッ、今度はスグルが金網の壁を駆け上がったぞ?　なにが飛び出すのか!
あーッとミル・マスカラスばりのフライング・クロスチョップだぁ!
万太郎、これを毒霧で迎撃(げいげき)~!　……いや、毒霧ではありません!
タンです!　タンのようです!
しかも、真上に向かってタンを吐いたもんだから、自分の顔にかかってしまいました!
自爆!　自爆であります!　万太郎、タンで自爆!
さぁスグルが万太郎をカバーにいったぞ!　決まるか決まるか~ッ?



……ん、ちょっと待ってください？
確かこの試合にはスリーカウントルールはないはずです！
スグル、完璧にルールを忘れております！　アホです！　アホアホ親子です！』

——怒りに耐えかねて、キッドが立ち上がる。
そして、「もうやめろ！」と叫ぼうとした——その時。
突然、天井の照明が消え、リングが暗闇に包まれた。
瞬間——暗闇の中で。
万太郎は、上になった父親の呻き声が聞こえたような、気がした。

暗黒の中……悲鳴と怒号がアリーナを交錯した。
どうやら過電流でブレーカーが落ちたようだ。
「非常灯をつけろ！」と誰かが叫んだ。
やがて。
非常灯が点灯し……金網のリングが、ぼうっと浮かび上がった。

そして、そこには。

呆然（ぼうぜん）と立ちすくむ万太郎の姿と——

もはや虫の息となった、初代キン肉マン・キン肉スグルの姿があった。

首・背骨・腰骨・そして左右の大腿骨（だいたいこつ）……合わせて五カ所の、粉砕（ふんさい）骨折。

そのさまは、〝五所蹂躪絡み（ごどころじゅうりんがらみ）〟——キン肉バスターを受けたようにしか、見えなかった。

「ち……父上？」

まだ何が起こったのかわからない万太郎が、ぽつりと、つぶやいた。

7

アリーナを一瞬の沈黙が支配し——

すぐにそれは、耳をつんざくような罵声（ばせい）に代わった。

「万太郎（まんたろう）！　なんてことをッ！」

「暗闇の中で技をかけるなんて汚ねぇぞ！」

「やっぱりテメェが伝説超人（レジェンド）たちを殺したのか！」



観衆が、万太郎の仕業と決め付けたのも無理はない。
試合前には、複数の立会人が金網を厳重にチェックしていた。
上下四方、人が入れるような隙間は全くない。
もちろん〝秘密の扉〟などは存在しない。
唯一の扉はバーナーで溶接され、ガッチリと閉ざされたままだ。
文字通りの〝ロックトルーム（密室）〟での凶行——
万太郎以外の者にそれが不可能なのは、誰の目にも明らかだったからだ。

リングサイドの皆が恐怖で固まっている中——キッドが、リング下に走り寄る。
そしてスグル大王の姿を間近で見るなり、蒼くなって叫んだ。
「ミート！　救急班だ！」
「そ、そんな……II世が父親に手をかけるなんて……そんな馬鹿な！
有り得ないよッ！　……」

「しっかりしろッ、泣いてる場合か！」頬をひとつ張り飛ばして、

「早く救急班を呼んでこいッ！　俺はバーナーで金網を開ける！」

「ハ、ハイッ！」

――そこへ。

「ミート……行かんでもよいぞ」

と、金網の中から微かな声がした。

スグル大王だ！

「自分の体は自分が一番良くわかっておる……ミートよ、ワシはもう駄目じゃ」

「――スグル大王！」

「……万太郎……そこにおるのか？」

すでに、目も見えなくなってきているようだ。

万太郎は必死で涙をこらえながら、返事を絞り出した。

「うん。ここにいるよ、父上」

「……息子よ……

お前がやったんじゃないってことは、ワシが誰よりも、よく知っている」



「父上！　……」

我慢していた熱いものが、万太郎の目から溢れ出た。

その大粒の涙が、スグル大王の顔の上にこぼれ落ちる。

「……フフ。まさか、タンじゃないだろうな万太郎。もう勘弁してくれよ」

「――父上っ！　死なないで！　死んじゃやだッ！　……」

「息子よ――キン肉マンII世よ。これは、ワシがお前にしてやれる……最後の手向けだ」

そう言って、スグル大王は、自らのマスクに手をかけた。

「火事場の……

火事場のクソ力～ッ!!」

カッと目を見開きながら……

最後の力を振り絞り、スグル大王は叫んだ！

「〝フェイス・フラッシュ〟！」

スグル大王自身、28年前・キン肉星王位決定戦の際にしか見せたことのない、キン肉星の王位継承者だけが持つ究極の技・フェイス・フラッシュ！　――

マスクをずらしたその素顔から、とめどない閃光が放たれ、万太郎の体に降り注いだ！

……そして。

初代キン肉マン・スグル大王は、息絶えた——

「ち、父上～!!!!」

8

初代キン肉マン。

長らく地球の平和を守ってきた、あのキン肉スグルが、死んだ……

しん、と静まりかえるアリーナの真ん中で。

万太郎は、コーナーサイドに畳んであった父親のガウンを、そっと亡骸の上に被せた。

涙を拭き、すっくと立ち上がる。

その目には……つい先程までとは全く違う、叡智の煌めきが宿っていた。

そう——〝フェイス・フラッシュ〟を浴びたおかげで——

アホアホだった万太郎が、今、〝宇宙一の天才少年〟に生まれ変わったのだ!

万太郎は、場内をゆっくりと見回しながら、低い声でつぶやいた。

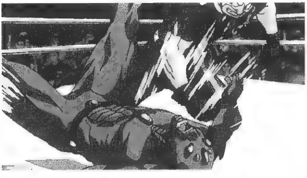


「ボクは決して、犯人を許さない――」
大人びたその声は凜とした決意に満ちている。
あまりの万太郎の変わりように……
観衆は皆、あんぐりと口を開けたままだ。
さらに万太郎が言い放つ！
「謎はすべて解けた！
伝説超人を次々と殺した犯人。セイウチンを殺した犯人。
そして、ボクの父上を殺した犯人――
それは、このアリーナの中にいる！」

9

一瞬の沈黙――
それを破って、キッドが吠えた。
「なにいってんだ！　てめぇがやったんじゃねえか！」

「まぁキッド、興奮せずに聞いてくれ。
まず――キン肉星で開かれた、宇宙捜査会議のことを思い出してほしい。
あの時、ボク……お寒いギャグを言ったよね？
ラーメンマンの行方がわからないっていう知らせが入った時のことだ」
「覚えてねぇよ、そんなもん！」と激高するキッドを制して、
「あぁ――確か」とジェイドが言った。
「万太郎は、大広間の扉を指差して、こう言ったんだ。
〝あ、ラーメンマン！　……な～んちゃって！　アホが見る～ブタのケツ～〟」
――瞬間、アリーナの空気が、カチンコチンに固まった。
「な、なんだ、この空気は？　俺がハズしたみたいじゃないか」ジェイドがわめいた。
「違うぞ、万太郎が言ったギャグだぞ！」
「そう。我ながら最悪のギャグだった」と万太郎。
「でも、あの時……部屋にいた全員が引っ掛かって、思わず扉のほうを振り向いたのを覚えているかな？
あの時点では、ラーメンマンの生死はハッキリしていなかったからね。



でもあの瞬間……扉を見ようともしなかった奴が、ただひとりだけいたんだ。
なぜならそいつは――」
万太郎はズバリと言った。
「〝すでにラーメンマンが死んでいた〟ことを知っていたからさ！」

アリーナ中が、静まりかえる。
と、そこへ……
「そのとおりだ、万太郎！」という声が響き渡った。
アリーナの正面扉から入ってきた、大きな影――ロビンマスクだ！
そして。その後ろからは……息子のケビンマスクの姿が！
ロビンは、万太郎に向かって言った。
「私も、そのことに気がついていた。でもまさか、〝あいつ〟がラーメンマンを殺したなんて――どうしても信じられなかった。
で、息子と一緒に〝証拠〟を見つけるために奔走してたってわけさ」
「ダディに話を聞いたときはビックリしたよ――」とケビン。

「俺はいろんな星で、強敵を叩(たた)き潰(つぶ)すひとり旅を続けていた。
一匹狼が性(しょう)に合ってる俺だが……さすがに伝説超人(レジェンド)が次々と殺されてるとあっちゃあ、放っておくわけにもいかん。
ま、ダディとのふたり旅は、ぞっとしなかったけど、な」
ケビンは、父親の顔をちらりと見ながら笑った。
「ありがとう、ロビン、ケビン。
さ、お次は……セイウチンの件(ケース)を思い起こして欲しい」と万太郎。
「いまわの際(きわ)に、セイウチンが言った言葉……これは覚えているかな、キッド」
「忘れもしないよ。〝ソノ、ヒタイの、ニクのモジは!?〟――」
「その通りだ。でも……おかしいと思わないか？
これは連絡船の中で、凜子(りんこ)ちゃんからの手紙を読もうとしたときに気付いたことなんだけど――セイウチンは漢字が読めないんだ。どうして〝ニク〟って読めたんだ？」
「――――」
「さらに。あの宇宙連絡船は、ボクとセイウチンのふたりで、重量制限ギリギリだった。
ほかには誰も乗ることはできなかったはずだよね。



でも……

かろうじて乗り込むことのできた男が、この中に、たったひとりだけいるんだ」

キッドがあえいだ。

「……まさか!?」

「そう、そのマサカリかついだ金太郎だ。

宇宙捜査会議に出ていた男。

伝説超人たちをも、油断させて、背後からなんなく襲える男。

体重わずかに25キロ。重量制限に、ほとんど影響のない男。

そして……漢字の読めないセイウチンでも、ヒタイの文字が読める——

たとえば、ヒラガナで〝にく〟と書かれてある男。

真犯人は、お前——アレキサンドリア・ミートだ」

10

死のような沈黙が続いた。

やがて――狂ったような笑い声が、アリーナに響(ひび)き渡った。

「ハハハ～！　ちょ、ちょっと待ってよII世！　……どうかしちゃったんじゃないの？　あの無敵の伝説超人(レジェンド)たちが、ボクなんかに、むざむざ殺されるはずないじゃない！　なにを言い出すかと思ったら――」

「まァ待ちなよ」と万太郎(まんたろう)が遮(さえぎ)った。

「セイウチンのように、突然、背後から襲ったケースもあったろう。

〝ミートです！〟と正面から近付いていって、油断をついて襲ったケースもあったろう。

ま、これは想像だが――

ラーメンマンやブロッケンJr.……そしてテリーマンを相手にした場合には、確かに、油断を引き出すのは難しかったかもしれない。

でも、〝体が小さい〟というのは、実は大変な武器になり得るんだ。

相手の闘気や殺気を頼りに闘える伝説超人(レジェンド)たちにとって、〝敵の体が小さい〟というのは、逆に災(わざわ)いする――

闘気を頼りに顔面を狙(ねら)ったつもりが、外してしまうこともあっただろう。

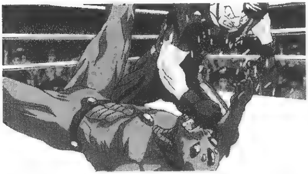
たとえば、砂塵(さじん)の嵐の中で。たとえば、夜の森の中で。たとえば、霧の中で――



場所を選んで、姿を隠しながら闘えば――
彼らを倒すのも、けして不可能なことじゃない。
貴様は、ラーメンマンを殺したその足で、涼しい顔で、牛丼星のボクに会いに来たんだ。
そして捜査会議が終わったあと、今度は高速艇で、ジェイドとキッドの船を追い抜いて地球へ向かい――ブロッケンJr.とテリーマンを殺したんだ」

キッドとジェイドが、思わず握りこぶしを固めて〝真犯人〟を睨んだ。
万太郎の推理が続く――
「ふたりを殺したあと、今度はすぐにキン肉星にとって返して――
ボクとセイウチンが乗った連絡船の倉庫に身を隠す。で、セイウチンの隙を見て、チョークスリーパーで絞め殺したってわけさ」
「じゃ、じゃあ」と、〝真犯人〟は問い掛けた。
「じゃあ、スグル大王のことはどうなのよ？　ボク、金網の外で、試合を見てたじゃない！　殺せるわけないじゃない！」
「そのトリックもわかってる。

ジェイド……もう一度、アリーナの天井照明を付けてもらえるかな？」
「——わかった！」
ジェイドが、壁のブレーカーを上げに走った。
ややあって……アリーナの天井の照明が、再び点灯する。
「みんな……今度は非常灯もついたままだ。金網の天井部分を、ようく見ておいてくれ」
アリーナの天井の照明で、金網の天井部分が熱せられていく……
キッドが、ハッと気付いた。
「そうか！　——形状記憶合金か!!!」
「その通り。金網の天井部分だけは、温度が上がると変形する仕組みになっていたんだ。
最高温度になって変形し始める頃合に——
ちょうどブレーカーが落ちて、暗闇になるって寸法さ」
万太郎が、父親の亡骸をそっと、ずらす……
すると、次の瞬間！
アリーナの天井照明が再び消える！　と同時に——金網の天井部分がグイーンとアメのように変形し始め……リングの中央を、凄まじい勢いでどーんと叩きつけた！



そして。非常灯の明かりのもと…
たゆんだ〝凶器〟が、再び元の形に収まっていく――

「――ということさ」と万太郎が言った。
観客は、寂(じゃく)として声もない。
「言うまでもないことだが――
このリングを作ったミートが、金網リングの天井を20メートルもの高さに設定したのは、キン肉バスターを考慮してのことじゃない。
ミートは、できるだけ金網の天井部分を、アリーナの天井照明に近付けたかったんだ……そうじゃないと、形状記憶合金の温度が上がらないからね」
「でも万太郎――」とジェイドが疑問を呈(てい)した。
「確率が悪過ぎないか？　たまたま大王に金網が炸裂(さくれつ)したから成功したけどさ――」
「関係ないよ」
万太郎は、父親の亡骸にそっと目をやりながら答えた。
「ミートにとっては――父上が死んでも、ボクが死んでも、ふたりとも死んでも、結果は

どうでも良かったんだ。

なんせ彼の目的は、正義超人全員の皆殺しにあるんだからな！」

「ちょっと待ってよII世！」

〝真犯人〟がわめいた。

「どうしてこのボクが、正義超人たちを皆殺しにしなきゃいけないのさ！　動機がないじゃん、動機が！」

「そのワケは、ロビンとケビンが知っているはずさ」と万太郎が言った。

「その通りだ」ケビンが口を開く。

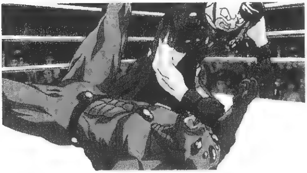
「俺は、ダディから〝ミートが怪しい〟と聞かされたとき……

どうしても信じられなかった。ダディも考えは一緒さ。

ってことは、答はひとつ――そこにいるミートは、本物のミートじゃないってことだ」

＝

場内がどよめく中、ケビンは続けた。



「俺とダディは、すぐに本物のミートを探す旅に出た。すでに殺されているのか。あるいは、どこかに拉致されているのか——少々、焦ったよ。で、幸いなことに」

ケビンは背後の扉を振り返った。

「やっと見つけたよ。タイタンで、カチンコチンになっていやがった……あと5分遅けりゃ、ヤバかったかもな？　ミートさんよ」

その呼びかけを受けて——〝本物の〟ミートが、扉から姿を現した！

まだフラついているその体は、凍傷を覆う包帯で、痛々しい限りだ。

「ご迷惑かけました……お久しぶりです、II世！」

「ミート、無理すんなよッ！　さて——」

と万太郎は、ここでアリーナの〝読者席〟に身を向けた。

「賢明なる読者諸君なら、すでにお気付きのことだと思うが——

今回の事件で、〝会話文〟以外の、いわゆる〝地の文〟では……一度も〝ミート〟という名前は登場していない。

だって〝ミート〟じゃないのに、〝ミートは○○と言った〟なんて書いたら、ウソを書くことになるからね!

唯一、ホンモノのミートが登場するのは、110ページのタイタンのくだりだけだ。

拉致されてた〝ホンモノのミート〟は、犯人である〝ニセモノのミート〟が戻ってくるのを恐れてた……

でもそこに現れたのは、救出に来たロビンたちだったってわけさ。

この〝ホンモノのミートとニセモノのミート〟を混同してしまった人がいたとしても、ウソを書いたワケじゃないから、作者の責任じゃない。

まァこれは、推理(ミステリ)小説の世界では、〝叙述(じょじゅつ)トリック〟って呼ばれてる手法なんだがね」

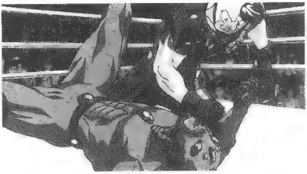
〝読者席〟が、一瞬、静まり返った。

ところが、次の瞬間——〝読者席〟から、罵声(ばせい)の嵐が万太郎を襲った!

「おいおい、ミステリの講釈まで始めたぞ!」

「わかってんだよ、んなこたァ!」

「〝だがね〟ってなんだよ? 気取んじゃねぇよ! 年いくつだ、オマエ!」



「　　　　　　　　　　！」↑（あなたなりの万太郎への罵声を書き込んでください）

（あれっ？）

万太郎は聞かなかったことにして、読者席に背を向けた。

そして……金網の外で立ち尽くしている〝にせミート〟に向かって、

「さぁ――どうする？　〝にせミートくん〟よ！」と迫る！

〝にせミート〟はわめいた。

「そ、そっちがニセモノのミートだ！　俺がホンモノだッ！」

「どうでもいいけど、口調が変わってるよ、〝ミートくん〟？」

「うるせぇ！　そ、そうだ――なにか証拠でもあんのか？　俺が犯人っていう、よ？」

〝にせミート〟が最後のあがきを見せる。

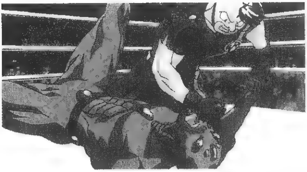
だが――万太郎は、静かに言った。

「証拠ならあるよ」

「な、なんだと？」

「キッド。そいつの腕の包帯を、取ってくれないか」

「オッケイ！」
キッドが、〝にせミート〟に組み付き……腕の包帯を剥ぎ取りにかかった！
「お前はそのキズを、凍傷だと言ってたが、そうじゃない——」
「や、やめろ～ッ！」
包帯が巻き取られ——〝にせミート〟の腕のキズが、露になっていく。
そこには……二つの大きな穴のようなキズが残っていた。
「それは、セイウチンをチョーク・スリーパーにかけた時——あいつの牙で噛まれたキズさ。なんだったら、セイウチンの牙と、その傷痕を照合しようか？　ま、確かめるまでもないが」
「——!!」
「悪あがきはやめて、そろそろ正体を現したらどうだ——」
万太郎が、〝にせミート〟に言い放った！
「父上から、お前と闘った話はよく聞かされたもんだよ。自在に変身を遂げる、悪魔超人・地獄の六騎士のひとり！　スニゲーター！」



「グググ……オヤジとは違って、頭の切れる坊やだな……」

〝にせミート〟は──突如、変身し始めた。

「も……もう少しで、てめえらを、秘密裡に皆殺しにできたのに……」

場内に悲鳴が飛び交った。

肩が割れ、顔面が割れ──疣のような無数の小突起に覆われた肉片が、ぼこっぼこっと飛び出してくる！　……

「しゅる～……しゅる～……」

胸部が隆起し、はんっと音を立てて破裂する。

そこから緑色の血を噴き出しながら……みるみるうちに全身が肥大化していく。

四肢の先端から骨が突き出て、それらがそのまま、〝巨大な指〟へと変態する。

そして、遂には──巨大な肉食恐竜の、足の形となった！

「いかにも俺様は……」

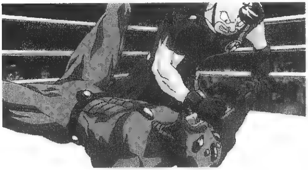
その指先のひとつにバコッと──爬虫類独特の表情のない顔が現れ、万太郎を睥睨した。

「──30年前、初代キン肉マン・キン肉スグルに血だるまにされた地獄の悪魔騎士！

スニゲーター様よ！　いくらでも貴様を殺す機会はあったのに、派手な舞台を待ってたのが間違いだったようだ……
キン肉万太郎——今こそ、貴様も殺す！」

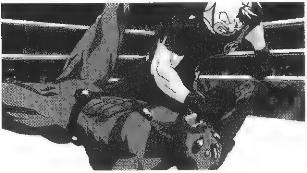
12

（ス、スニゲーター！　死んだ筈じゃ!?　……）
ミートの脳裏に、30年前の死闘がまざまざと蘇った。
全宇宙の超人パワーの源——キン肉族ゆかりの黄金のマスクを奪いさり、正義超人の全滅をもくろんだ〝悪魔超人・地獄の六騎士〟。
そのひとり・スニゲーターは、キン肉スグル激闘の歴史において、ひときわ異彩を放つ強敵だった。
（あの時も確か……スニゲーターは、ワニの形態から次々と、変身を遂げた筈だ）
進化を自在に操り、あらゆる生物はおろか、無機物にまで変身を遂げる〝究極爬虫



類〟スニゲーターは、
――ワニから、古代亀・アーケロンへ。
そして巨大トカゲへ。
さらには巨大なスニーカーにまで、次々と脱皮を繰り返し――初代キン肉マンを窮地に追い込んだものだった。
そして最後に見せた、その正体は――
当時、地上最強の肉食恐竜と思われていた〝暴君竜〟ティラノサウルスの足であった。
(だが――)
とミートは、復活したスニゲーターを見て、恐怖した。
(30年前とは大きさが全然違う！
あれは……ティラノサウルスの足どころのデカさじゃないぞ！)
その呟きが聞こえたのか。
スニゲーターは、ミートに向かって「グフフ……」と不気味な笑い声を上げた。
「俺様の変身パワーを昔と同じと思ってもらっちゃ困るな、ミート。
今の俺様の実体は――ティラノを遥かに上回る、正真正銘の地上最強生物！

「ギガノトサウルスの足よ！」
アリーナに戦慄が走った。
近年その化石が南アメリカにて発見され、古代生物学界を震撼させた地上最大の肉食恐竜・ギガノトサウルス——その巨大な足が、新生スニゲーターとして、今蘇ったのだ！
観客は、我先に出口を求めて逃げ出した！
「で、でも」ミートはうめいた。
「どうして生き返ることができたんだ!?　……」
「貴様、トカゲの再生機能を知らんのか？　俺様は中枢神経さえ残っていれば、たやすく復活できるのさ！
さぁ——これからが本当の、ショウ・タイムだ」
スニゲーターが叫んだ！！
「30年間の恨み、ここに晴らさん！　〝ゼグメネーション・トランスフォーム〟！」
その刹那！
スニゲーターの4本の足指が、4体に分裂し——それぞれが、毛穴から再び緑色の血を噴出し始めた！



そして瞬く間に、それぞれの指が変身を遂げていく。
皮膚を覆っていた疣のような小突起がへこみ……
次に、のっぺりとした手が生え、足が生え……
頭が、突き出してくる。
どうやら人間型への変身のようだ。
だがそれらは、……似てはいるが、明らかに別々の人格を持っているように見える。
やがて──4体の分裂スニゲーターは変身を終えた。
それを見て。
キッドとジェイド、そして万太郎の顔色が変わった。

「パ……パパ⁉」
「──師匠！」
「ち……父上ッ⁉」

そして、ロビンとケビンも思わず呟いた。

「ラ、ラーメンマン!!」

分裂スニゲーターが変身(トランスフォーム)した4人——それは。

ラーメンマン・テリーマン・ブロッケンJr.——そしてキン肉スグルの4人であった。

「どうだ、おまえら」と〝にせキン肉スグル〟が、あざ笑った。

「〝俺たち〟に歯向かえるか？　…グフフ……」

「き、貴様……よりによって父上にッ！　……許さんぞッ！」

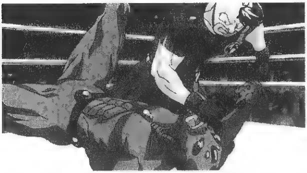
万太郎の額に、〝肉〟の文字がボッと浮かび上がる！

「股間(こかん)にイチモツ、手にニモツ〜ッ！」

万太郎は、渾身(こんしん)のタックルで金網をブチ破り、外に飛び出した！

「スニゲーター！　宇宙(そら)で勝負だ！」

「望むところよ！　おまえら全員——まとめて皆殺しだ！」



アリーナの天井をブチ破り、宇宙にジャンプする〝にせ伝説超人(フェイク・レジェンド)〟たち！
それを追って、万太郎が……そしてキッドとジェイドも、宇宙へと飛び出した！
ロビンが、ケビンの肩を叩く。
「ラーメンマンの相手は、お前がつとめろ——骨も残すんじゃないぞ！」
「フフ。言われなくてもわかってるさ、ダディ」
ケビンは、マスクの後ろから伸びる長髪をひるがえし——宇宙(そら)へとジャンプした。

にせテリーマンVS(バーサス)テリー・ザ・キッド！
にせブロッケンJr.VSジェイド！
にせラーメンマンVSケビンマスク！
そして……にせキン肉マンVSキン肉万太郎！

最後の死闘が、始まった。

宇宙に飛び出した万太郎たち新世代超人(ニュージェネレーション)は——にせ伝説超人(フェイク・レジェンド)たちと、それぞれガッチリと組み合った。

だが、伝説超人(レジェンド)たちを殺した新生スニゲーターの実力は、本物といささかも遜色がない。

いずれのバトルも新世代超人(ニュージェネレーション)たちは、いきなりの大苦戦を強いられていた。

それはまるで、彼らにとっての——

伝説超人世代を越えるための、踏絵のような闘いにも見えた。

キッドは、〝にせテリーマン〟に裸締(スリーパーホールド)めをかけられ、もがいていた。

耳元で〝にせテリーマン〟が、父親そっくりの声で囁く——

「どうだ、キッドよ……パパには逆らえないだろ？」

（パ……パパの声だッ！）



「闘いとは――時に負けることも大事なんだ。それはわかるよな、キッド？」
（グ……ググッ！　パパが言ってた言葉の真意は、そんなこっちゃない！　……で、でも！　……）
キッドは戦意が喪失していく自分を、どうすることもできない。
ジェイドは、〝にせブロッケンJr.〟に膝十字で締め上げられていた。
「ジェイドよ――もう楽になれ」
（レ……師匠ッ）
「みなしごだったお前を、ひとり前の正義超人に育てあげた恩を……まさか、忘れちゃいまいな？」
（――畜生ッ！　コイツはニセモノじゃないか！　しっかりしろ、ジェイド！）
自らに言い聞かせるものの、ジェイドの体にも全く力が入らない！　……

ケビンマスクは〃にせラーメンマン〃と、宇宙空間で距離を取って対峙していた。
「ケビンよ――」と〃にせラーメンマン〃は静かに言った。
「貴様は、正義超人の風上にも置けん男だ」
「なにッ？」
「一匹狼として世を渡るのもよかろう。
だが、父や母の気持ちを一度でも考えたことがあるのか？」
「――」
「荘子曰く〃父母・我を生みて苦労せり〃――
このラーメンマンが……親の気持ちを踏みにじる不逞の輩を成敗してくれるッ！」
（ま、待て。コイツは、ニセモノに過ぎん！）
だが、一瞬の油断をついて――
「竜巻旋風脚！」
にせラーメンマンのスピンキックが、ケビンの腹部を鋭くえぐった！
「グ……グエェッ！」



そして万太郎は――

〝にせキン肉スグル〟に踵ひねり固め（ヒールホールド）で、靭帯（じんたい）をねじ切られようとしていた。

「覚えておるかの、万太郎よ――この技を？」

「クッ……な……なにィッ？　……」

「ヘラクレス・ファクトリーの最終試験において、初めてワシがお前と闘ったときに、かけた技じゃ。
懐（なつ）かしいのォ万太郎……これで靭帯がちぎれても、本望じゃろォ……？」

まるで催眠術（さいみんじゅつ）にでもかかったかのように。

万太郎は思わず「ハイッ、父上」と、答えそうになった――

その時である。

宇宙（そら）の彼方（かなた）から――16個の宇宙カプセルが、揃（そろ）って飛来した。

「あ、あれはッ！　……」

万太郎たちは、一斉（いっせい）に声を上げた！

それは、死んだ超人たちの亡骸(なきがら)を乗せた棺(ひつぎ)であった。
偶然か――あるいは、超人の彷徨(さまよ)う執念が成(な)せた業(わざ)なのか。
銀河の煌(きら)めきに照り映(は)えるカプセル群は……
まるで虚空(こくう)から、万太郎たちの闘いを見守っているように見えた。

「パ、パパ～！」とキッドが叫ぶ！
「師匠(レーラア)！」とジェイドが涙ぐむ！
「伝説超人(レジェンド)たちよ――これが俺の生き様(ざま)だッ！　そこで黙って見てろッ！」とケビン！
「セイウチン！　……お前の死、けして無駄(むだ)にはしないぞ！」と万太郎！

新世代超人(ニュージェネレーション)たちの体に――たちまち力が漲(みなぎ)った！

「いいかッ！　必殺技(フェイバリット・ホールド)ってのは――こうやってかけるんだッ！」
キッドが〝にせテリーマン〟のバックに回って両足を取り……渾身(こんしん)の力で絞り上げる！
「テキサス・クローバー・ホールド！」



ジェイドが、膝十字を力まかせに外し、距離を取る！
そして——ボッと火が灯った手刀の刃を〝にせブロッケンJr.〟の全身に浴びせかける！
「ベルリンの赤い雨！」

ケビンが、〝にせラーメンマン〟を担ぎ上げ——
ラーメンマンの棺めがけて、脳天から叩きつける！
「ビッグベン・エッジ！」

上体を起こした万太郎は——
「餅つきヘッドバットーッ！」
〝にせキン肉スグル〟の踵固めを、頭突きの連射でクリアー！
さらに、敵の体を高くさし上げ——両の内腿をガッチリとロックした！
「うりゃあああああ！」
そのまま一気に落下しながら——

真下にあるアリーナの屋根を突き破り、さらには金網の天井をもブチ破り――
スグル大王の亡骸が横たわる、リングの上へと叩きつけた！
「キン肉バスター！！！！！！」
「グ、グエエエエエエエエエッ！」

4体の分裂スニゲーターが――一斉に断末魔の叫びを上げた！
そして。
その木っ端微塵となった肉片が、16個の宇宙カプセルへ――
さらに、キン肉スグルの亡骸の上へと、飛散した。

14

ここに死闘は終わりを告げた。
だが。
万太郎たち新世代超人たちの胸に去来するのは、言い知れない喪失感だけだった。



アリーナへと戻ってきた彼らの間には、口には出さないものの――
同じ言葉が渦巻いていた。
(死んだ超人たちは、もう戻ってこない……)
万太郎は、傍らに横たわる父親の傷だらけの体を見つめながら、その胸に誓った。
(父上。このキン肉万太郎――
〝キン肉マン〟の名を恥ずかしめぬよう、今後も精進し続けます。
天から、見守っていてください)

と、その時。
死んでいたはずのスグル大王が――パッチリと目を開け、かすかにつぶやいた。
「ぎゅ……牛丼……」

「……ち、父上～!!　!?」
「牛丼食いたい」

呆然とする一同――
と、そこへさらに!
今度は、アリーナの破れた屋根から……
殺されたはずの超人たちが舞い降りてくるではないか!
ミートが泣き叫ぶ!
「ラ、ラーメンマン!　テリーマン!　ブロッケンJr.!　バッファローマン!　ウォーズマン!　セイウチン!　……い、いったいこれは!?」
「――わかったぞ!」と万太郎が言った。
「スニゲーターの再生細胞を浴びたおかげだッ!」
「な、なるほど、そうか!　……」ミートが涙を拭いながら、
「II世……今日は冴えに冴えてますねっ!」
だが、次の瞬間。
万太郎は、震える手で……アリーナの正面扉のほうを指差した!
「あっ!　……あそこ!　スニゲーター!　……」
一斉に一同が振り返る!



「……なーんちゃって！　アホが見る～ブタのケツ～」

ズッこける一同。

ミートが、万太郎の目をのぞき込んで――溜息(ためいき)をついた。

「え～と……ご報告です。

どうやらたった今、フェイス・フラッシュの効き目が消えたようです。

また、アホアホの目に戻ってます」

「腹減った……カルビ丼食いたい」

再び一同はズッこけた。

「パパー！」

テリーマンの胸へと、泣きながら飛び込むキッド。

「師匠(レーラァ)……よくご無事で！　……」

ブロッケンJr.と固く抱き合うジェイド――

蘇(よみがえ)った伝説超人(レジェンド)と、新世代超人(ニュージェネレーション)たちの歓喜(かんき)の輪が広がる中で。

ケビンマスクは、「フン。くだらねぇ」と吐き捨てるように呟(つぶや)きながら――

ひとり背を向け、アリーナの扉を押した。

(無駄な時間を過ごしちまったぜ。やっぱり俺には——ひとりが性に合ってる)

ロビーには、すでに人っ子ひとりいない。

(グッバイ、ダディ)

そのマスクの後ろから伸びた長い金髪が、アリーナから流出していく空気に揺れた。

アリーナの中には——

キン肉マンとキン肉マンII世の、まるきり不毛なアホ問答が、いつまでも響き渡っている。

「牛丼食いたい」

「カルビ丼食いたい」

「牛丼食いたい！」

「カルビ丼食いたいっ！」——



SECOND GENERATIONS

～おわりに～

ミートくん＆キン肉マンⅡ世・キン肉万太郎からのご挨拶（あいさつ）

出囃子（でばやし）……「HUSLE（ハッスル）　MUSCLE（マッスル）　～キン肉マンⅡ世のテーマ～」

ミート「皆さん、最後までお付き合いいただいてありがとうございました！
アレキサンドリア・ミートです！」

万太郎「レオナルド・ディカプリオです！」

ミート「……あんた、父親とボケのベクトルが一緒だな！」

万太郎「ブラッド・ピットです！」

ミート「もういいってば！」

万太郎「ジャン・クロード・バンガガッ」

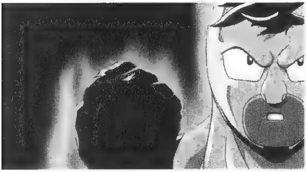
ミート「噛んでまでボケないでいいよ！　なんだよ〝バンガガッ〟って！」

万太郎「バンダガッ」

ミート「言えないんならいいですよ、もう！」

万太郎「————!!」

ミート「……なに、本気で舌、噛んじゃったの？
……じゃ、ちょっとひと休みしててください。
えーと、今回はボク、出てるようで、実はほとんど出てません！
（おわかりですよね？）
しかも拉致されてたタイタンじゃあ気を失いかけてて、記憶もほとんどない始末
なんで——せめて最後に、キチンと挨拶させていただきます！
キン肉マンII世こと・キン肉万太郎の活躍は、これからも続いていきます！
私・ミートともども、II世への声援・ご贔屓のほど、
なにとぞ宜しくお願いしますっ！



……さ、ホラ、Ⅱ世！　一緒に頭下げて！」

万太郎「うるさいなァ……あっ！　あれは！　……り、凜子ちゃーん！」

ミート「ちょ、ちょっと、どこ行くんですかⅡ世！
……あ～あ、凜子ちゃんを追いかけてっちゃった。
皆さん、失礼はボクのほうからお詫びしますっ！
本当にどうも、ありがとうございました！」

……と、舞台を降りるミートの胸に。

（そういえば）と、突然、妙な疑念が兆（きざ）した。

（ボクは〝にせミート〟に変身（トランスフォーム）したスニゲーターに捕まって、寒いタイタンに拉致されて以来……気を失いかけてて、ほとんど事件の記憶がない。でも）

とミートは、必死でタイタンの光景を思い返そうとした。

（ロビンとケビンが助けに来てくれたとき…

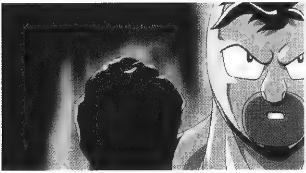
確かボクは、こうつぶやいてたような気がする。

〝早く逃げないと、あいつらが戻ってきちゃう！〟

——そうだ。〝にせミート〟だけじゃない。

ボクを拉致した〝敵〟は、ふたりいたんだ——）

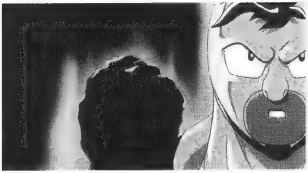
ミートは慄然（りつぜん）としながら、万太郎の背中を目で追った。



「凜子ちゃーん！　ちょっと待ってよぉ！」
〝凜子〟と呼ばれた少女は、いつもの恰好とは違い、大人びたファッションに身を包んでいる。
〝凜子に変身（トランスフォーム）した少女〟――スニゲーターの娘――は。
正体を気取（けど）られぬよう笑顔を作ってから――ゆっくりと、万太郎を振り返った。

（了）

SECOND WK GENERATIONS



POSTSCRIPT

小西マサテル

初めまして、ジョニー・デップです。
ウソです。
放送作家の小西マサテルと申します。
さて。
いきなり「企画書か！」みたいな書き出しをさせてもらいますが、ご容赦を。
ぼくが泳いでいる放送業界には、〝M1〟と呼ばれる視聴率用語が存在します。
〝M〟はmale（男性）の頭文字で――
〝M1〟とは、「20歳から34歳までの男性の個人視聴率」を意味します。
テレビ・ラジオに一番慣れ親しんでいるこの世代の数字を獲るために、ぼくたちは日夜、あの手この手で腐心しているわけです。（特に深夜番組では。）
今回のノベライズのお話を、ゆでたまごの嶋田先生直々から有難くも頂戴したとき――
一番最初にアタマに浮かんだのも、やはり次の思いでした。
（〝M1層〟にも読んでもらえる話にするには、どうしたらいいだろう？）

ただし。この場合の〝M〟とは、maleの〝M〟ではありません。
別の意味での〝M1（マッスルワン）〟――つまり、〝初代キン肉マン世代〟のことです。
「II世ファンにはもちろんのこと、昔ながらの〝M1世代〟にも、
絶対楽しんでもらいたい！」
この制約を自（みずか）らに課しつつ、構想を練りました。
闘いの連続で見せていくには、あの名作マンガに到底かなう筈（はず）もない。
なにか違うアプローチはないものか？
で、自分なりに捻（ひね）りだした結論というのが――〝もうひとつのM〟。
つまり、MYSTERY（ミステリ）（推理小説）の〝M〟だった、というわけです。

〝密室派（ロックトルーム・スクール）〟のディクスン・カーに、クレイトン・ロースン。
〝ドンデン返しの鬼〟ミッシェル・ルブランに、リチャード・ニーリィ。

絶版になっていた彼らのミステリを神田の古本街で漁るのが、ぼくの青春でした。
（はいそこ、引かない！）
というわけで、大好きなクラシック・ミステリの風味に、メタ・ミステリのスパイスを利かせつつ、これまた大好きなプロレス味をブレンドして、思いきりキン肉マンワールドにぶち込んでみました。
もちろん、ミステリファンじゃなくても楽しめるように書いた、つもり。
（っていうか大前提）

ラーメンマンにテリーマン、ブロッケンJr.。そして、初代キン肉マン――
おなじみの伝説超人たちが次々と、自らの必殺技で殺されていきます！
果たして〝真犯人〟は？

……どうですかーお客さん！　〝面白そう〟っしょー!?

立ち読みしながら、このあとがきから先に読んでいるあなた！
レジまで15歩だ！
買っていただけたら、いくらでも土下座する用意があります。見えないけど。

さて——閑話休題。
以下しばし、内容に踏み込んだ創作の舞台裏を明かします。
立ち読みしながら、このあとがきから先に読んでいるあなた！
レジまで8歩だ！
まずは買って中身を読んでから、以下の文章に進んでください。
買っていただけたら、いくらでも靴の裏をなめる用意が、ってしつこいか。

☠注意（ワーニング）！
まだ本文を読んでいない人は、次の☠マークまで、すっ飛ばしてください！

さてさて。

ミステリに詳しい読者の方々なら、先刻ご承知のことと思いますが——

ミステリにおける〝意外な犯人〟トリックは、すでに払底した感があります。

探偵が犯人・一人称の記述者（いわゆるワトソン役でんな）が犯人なんてのは、当たり前。

〝その本の出版社の社員さん〟が犯人。

さらには〝読者が犯人〟なんていう究極の意外性まで飛び出すに及び——

もはや犯人の意外性という名の土地には、ペンペン草も生えてません。

（そういや、コレってよく使う表現だけど……ペンペン草って何？）

もはや、意外な犯人像に残された余地は、〝心理的に〟疑惑の対象から除外したくなるような人物しかありません。

で……要するに、です。

ぼくが今回やりたかったこと、というのは——

〝お笑いの○○○○役＝（イコール）犯人〟。
これです。
……「な～んだ！」と鼻で笑うなかれ。
皆さんには、「お笑いが好きな人間に悪い人はいない」という先入観がありませんか？
お笑い魂（たましい）を持っている人間・ギャグを飛ばす人間に、本当に悪いヤツはいないのか？
……いえいえ！
そんなことはないんですよ～！
名前は出しませんが……ボクの周りのバラエティをやってる人間の中にも、
〝悪い人〟は、い～っぱい、それこそ掃いて捨てるほど、い～っぱいいます（笑）！
「わし、オモロイでっしゃろ～！」と近寄ってくる人間ほど……
実は一番、ワルかったりします（ぼくも含めて）。
つまり（説明すると格好（かっこう）悪いんですが）
この小説には、そんな裏テーマもあったりするわけで。

若い読者の方々に、感じ取っていただければ幸いです。

☠（すっ飛ばしてくれた方！　あとは読んでも大丈夫っす！）

最後に、この場をお借りして、お礼を。

様々な助言をくださった、集英社の丸宝（まるとみ）さん！
ご迷惑をお掛けしました！　ありがとうございました！

ボクが長年、構成を担当させて貰（もら）っている「ナインティナインのオールナイトニッポン・コム」の本番前の楽屋でのひととき――

本の帯を書いてもらおうと思い、（どう話を切り出そうか？）と迷っているところへ、

なんと！
「小西さん、小説書いたんやて？　よかったら、帯とか書きまっせ！」
と、先に声を掛けてくれた、ナイナイのお二人！
すんまへんな～(泣)
本当にありがとう。

今回なんとステキな「挿絵」まで描いてくださった、ゆでたまごの中井先生！
お忙しい中、ありがとうございました！
(特に〝ロックルーム・ダブルオクタゴン〟のイラストには大感激！
制作日数、実に２週間の大労作だそうで…
マジで皆さん、コレだけでも買った甲斐がありまっせ！)

そして——ゆでたまごの嶋田先生。

実は〝ゆでさん〟とは、友人としてお付き合いさせていただくようになってから、もう10年以上になります。

プライベートな部分でご迷惑をかけたことは、数知れず。

あの時も、そしてあの時も、それでもって、あの時も……

ホントにホントに、すいませんでしたっ！　まとめて謝罪させていただきます！

そんなぼくに、ある日掛かってきた、そっけない声の1本の電話。

「小西くん、小説書いてみいひんか。……夢やったんやろ？」

あの電話は、一生忘れません。

この本は、〝友情パワー〟の賜(たまもの)だと勝手に思い込んでいます。

本当にありがとうございました。

そしてそして——最後まで読んでくださった皆さんに、お礼かたがた一言。

個人的に一番好きな新世代超人（ニュージェネレーション）は、ケビンマスクです。

ワタシ、陰のある群れない無頼漢が好みなのです。

もし、新しいお話を書かせていただく機会がありましたら——

次回もきっと、ケビンが〝ある意味で〟大活躍するお話になることでしょう。

それでは、また。

小西　マサテル

POSTSCRIPT

ゆでたまご（嶋田隆司）

小西くん、この度は小説家デビューおめでとうございます。

放送作家の小西くんと最初に会ってから、かれこれ13年くらいの月日が経つでしょうか……あるお笑い芸人さんを通じて知り合ったのですが。（小西くん自身、その昔、漫才師を目指してた時があって、竹中直人を世に送り出した、あの伝説の〝新人芸人発掘番組〟横山やすし司会の「ザ・テレビ演芸」に出て8週勝ち抜きという輝かしい経歴があるのです！）

私もお笑いが好きな事もあって、すぐ意気投合し、それからはしょっちゅう会っては飲みに行って、お互いが趣味のプロレス、昔の漫画、映画の話などでもりあがるようになりました。そんな折に、小西くんが私に「自分は、いつかミステリー小説を書いてみたい」、「漫画の原作も書いてみたい」と色々夢を語ってくれた事がありまして、でもその時は飲みの席だったこともあり、月日も経って、私もその事はすっかり忘却の彼方だったんですが。

今回「キン肉マンII世」のノベライズのお話がきて、さて誰に書いてもらったらいいかと考えた時に、一番に小西君が浮かびました。

SECOND GENERATIONS

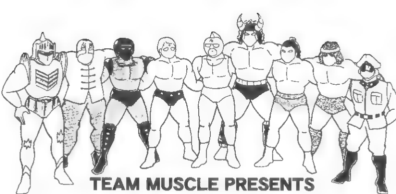
キン肉マンワールドというのは独特なものがあり、それを描く作家の人には面白いお話を作ってもらう事も大切なんですが、それに十(プラス)して格闘技に精通していて、ギャグセンスもある人でないと困ります。その点小西くんは漫才師を目指していた事もあるし、放送作家としても「リングの魂」という格闘技バラエティーを担当していた事もあり、まさに適任。そして今回出来上がった作品を見て自分の目に狂いがなかった事を再確認いたしました。通常の(レギュラー)「II世」とは趣(おもむき)が異なる全編ミステリー仕立てにしたことが斬新(ざんしん)で面白い！私も相棒も、原作者の立場を忘れて手に汗して楽しませていただきました。

読者の皆さんも、どうかこの一風変わったもうひとつの「キン肉マンII世」の世界を味わってください。

DATE

出　身:キン肉星
必殺技:キン肉バスター
　　　キン肉ドライバー
　　　マッスル・スパーク

KINNIKUMAN'S BIOGRAPHY



TEAM MUSCLE PRESENTS
★レジェンド★

(伝説超人SPECIAL)

本編で次々と殺された超人たち。
そんな彼らは「伝説超人」と呼ばれていたが、
「伝説超人」とは何だ?　という人のために、
ここで彼らを紹介しマッスル!!

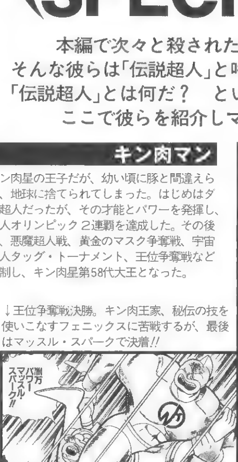


心に愛を秘めた真のスーパーヒーロー!!

キン肉マン

キン肉星の王子だが、幼い頃に豚と間違えられ、地球に捨てられてしまった。はじめはダメ超人だったが、その才能とパワーを発揮し、超人オリンピック2連覇を達成した。その後も、悪魔超人戦、黄金のマスク争奪戦、宇宙超人タッグ・トーナメント、王位争奪戦などを制し、キン肉星第58代大王となった。

↓王位争奪戦決勝。キン肉王家、秘伝の技を使いこなすフェニックスに苦戦するが、最後はマッスル・スパークで決着!!





↑悪魔将軍との死闘を制したのはキン肉マン。フィナーレは必殺キン肉ドライバー!!　地球に平和が戻った。

父上の強さは、ファクトリーの卒業試験で知っていたはずだけど、こんなに強かったなんて…。この悪魔将軍とか、コワソ～(漏らしながら)。



キン肉万太郎

TERRYMAN'S BIOGRAPHY



DATE

出　身:アメリカ・テキサス州
必殺技:スピニング・トゥホールド
テキサス・クローバー・ホールド
カーフ・ブランディング

小さいトロフィーしかないパパだけど、その実力は本物なんだ。でもオレはやっぱり一番しか望まないぜ!

テリー・ザ・キッド



テリーマン

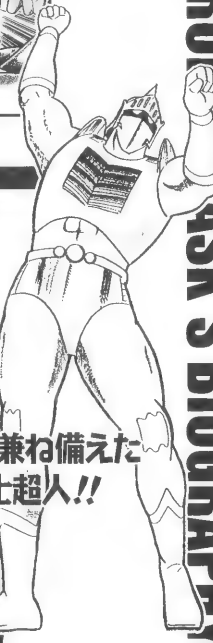
アメリカから来たクールな超人は、熱き友情パワーと、持ち味の粘り強さで数々の名勝負を残した。第20回超人オリンピックベスト4/世界超人タッグ選手権優勝/宇宙超人タッグ・トーナメント優勝。

熱き闘志のテキサスブロンコ!!



←秩父連山で魔雲天と対戦。1tの魔雲天を持ち上げ、バックドロップをかますテリー。パワーと泣かせるセリフ、テキサス魂をナメんなよ!!

ROBIN MASK'S BIOGRAPHY



ロビンマスク

代々、超人オリンピックで名を残してきたロビン家に生まれ、第19回に優勝する。第20回でキン肉マンに敗れたものの、その後はキン肉マンらアイドル超人の一員として熱く戦った。第19回超人オリンピック優勝/第20回準優勝

DATE

出　身:イギリス
必殺技:タワー・ブリッジ
ロビン・スペシャル



↑王位争奪戦で、マットに埋まりながらも、マリポーサにタワーブリッジを決めたロビン。正義超人たちは、親友キン肉マンのためなら死ぬこともためらわなかった。友情パワー!!

知性と威厳を兼ね備えた最強の紳士超人!!

親父との思い出は、「ああしろ、こうしろ…」まぁ実力は認めるけどよ。オレみたいなならず者とじゃ親子に見えないだろ?

ケビンマスク



RĀMENMAN'S BIOGRAPHY



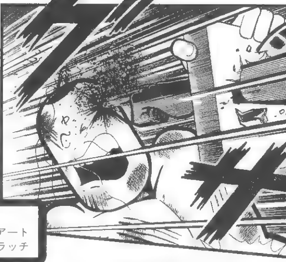
みつあみをなびかせ闘将(たたかえ)、ラーメンマン!!

ラーメンマン

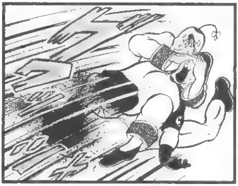
もとは血を好む残虐超人だったが、キン肉マンたちとの戦いを通じて、友情パワーに目覚める。一度は廃人同様になったものの復活し、自らを「モンゴルマン」と名乗り、何度も正義超人のピンチを救った。第21回超人オリンピックベスト4。

DATE

出　身:中国
必殺技:レッグ・ラリアート
　　　　キャメル・クラッチ



↑第21回超人オリンピックで、ウォーズマンのベアークロ一に脳天を貫かれ、植物人間に…。



←第21回超人オリンピック、ラーメンマン対ブロッケンマン戦。真っ二つにされたブロッケンマンの息子ブロッケンJr.は、ラーメンマンに復讐心を燃やす

BLOCKEN Jr.'S BIOGRAPHY



ドクロの紋章とゲルマン魂は正義超人の証!!

ブロッケンJr.

復讐の化身だったブロッケンJr.も、ラーメンマンとの対戦で互いを認め合い、その後はアイドル超人の一員となった。ブロッケン一族は、厳しい修行とドクロの紋章で超人になるのだが、勝つために ドクロの紋章を捨てて人間になるなど、勝利への執念は超人級。

DATE

出　身:ドイツ
必殺技:ベルリンの赤い雨



←王位争奪戦でプリズマンと対戦。相手の必殺技を防ぐため、紋章を捨てて人間に戻る。比較的地味役に徹していたアイドル超人時代の、ストレスが爆発!?

ジェイド



我がブロッケン師匠の歴戦は初めて見たよ。やはり、最高のファイターだ。オレも師を越えるため、特訓あるのみだ。そりゃー、ベルリンの赤い雨〜っ!!

WARSMAN'S BIOGRAPHY



↑愛用のベアークローで、バッファローマンのロングホーンを折った瞬間。これにより、後々キン肉マンが救われたことも…。

ウォーズマン

傷心のロビンマスクがロシアで見つけたロボ超人。両手に装着したベアークローは破壊力抜群。バッファローマンとの対戦で立ったまま大往生したり、死の世界に落ちたキン肉マンを逃がすため自ら盾になるなど、生身の超人顔負けの熱さで活躍した。

DATE

出　身:ロシア
必殺技:パロ・スペシャル



ロボ超人だってハートの熱さは負けないぜ!!

GERONIMO'S BIOGRAPHY



ジェロニモ

かつては生身の人間だった。サンシャインとの戦いに勝つものの、植物人間になってしまう。しかし、超人の神が課した3つの関門をクリアし、見事超人となって生還した。

根性と肺活量だけは負けないずら!!

DATE

出　身:アメリカ・オクラホマ州
必殺技:アパッチのおたけび

↓悪魔将軍にやられ、息絶える寸前に衝撃の発言!!「自分の命を救ってくれた勇敢な超人を見て以来、超人に憧れていた…」その願いは、やがて…



WOLFMAN'S BIOGRAPHY



ウルフマン

相撲技を駆使した攻撃で、アイドル超人の主力として活躍した。3度も死ぬが、その度に生き返った不屈の精神と、不死身の肉体を持つ相撲レスラー。



鋼の筋肉ってのぁオレのを言うんだ!!

←心臓停止したキン肉マンを救うため、自らの胸を貫いて魂を取り出す。この後、ジェロニモに髷を切らせ、息絶えた(涙)。

DATE

出　身日本
必殺技:合掌ひねり

BUFFALOMAN'S BIOGRAPHY

ぼやぼやしてたらロングホーンの餌食になるぜ!!



バッファローマン

もとは1000万パワーの悪魔超人だったが、キン肉マンとの戦いで正義に目覚め、正義超人の一員となる。

DATE

出　身:スペイン
必殺技:ハリケーン・ミキサー



↑バラバラになったミートくんをめぐり、キン肉マンとバッファローマンが死闘を演じた!!　初めてキン肉バスターが破れた試合でもあり、歴史に残る名勝負となった。

パラパラアニメ：2002夏東映アニメフェア　映画『キン肉マンII世』より

■初出

キン肉マンII世　SP　伝説超人全滅!　　書き下ろし

キン肉マンII世　SP　伝説超人全滅!

2002年5月30日　第1刷発行

著　者◉ゆでたまご　小西マサテル

装　丁◉亀谷哲也

発行者◉片山道雄

発行所◉株式会社 集英社

〒101-8050　東京都千代田区一ツ橋2-5-10

TEL　03-3230-6264(編集部)　3230-6393(販売部)　3230-6080(制作部)

印刷所◉大日本印刷株式会社

ISBN4-08-703115-2 C0093

j-BOOKS ★ COMIC & GAME NOVELIZE

[BASTARD!! I〜II] 萩原一至◉岸間信明　バスタードI〜II

[BASTARD!! POSTCARD EX] 萩原一至　バスタード　ポストカードEX

[CITY HUNTER] 北条司◉外池省二　シティーハンター

[CITY HUNTER II] 北条司◉稲葉稔　シティーハンターII

[CITY HUNTER SPECIAL] 北条司◉天羽沙夜　シティハンタースペシャル

[CITY HUNTER SPECIAL II] 北条司◉岸間信明　シティーハンタースペシャルII

[CAT'S EYE] 北条司◉高屋敷英夫　キャッツ♥アイ

[電影少女] 桂正和◉富田祐弘

[I"s] 桂正和◉富田祐弘　アイズ

[ろくでなしBLUES] 森田まさのり◉菅良幸

[Dr.スランプアラレちゃん] 鳥山明◉小山高生◉中鶴勝祥

[新きまぐれオレンジ★ロードI〜II] まつもと泉◉寺田憲史

[新きまぐれオレンジ★ロードIII] まつもと泉◉寺田憲史◉後藤隆幸

[爆炎CAMPUSガードレス] あかほりさとる◉せたのりやす

[SLAM DUNK] 井上雄彦◉菅良幸　スラム　ダンク

[こちら葛飾区亀有公園前派出所I〜II] 秋本治◉小山高生

[こちら葛飾区亀有公園前 派出所THE MOVIE] 秋本治◉大川俊道　ザ ムービー

[アウターゾーン] 光原伸◉山田隆司

[地獄先生ぬ〜べ〜] 真倉翔◉岡野剛◉菅良幸

[MIND ASSASSIN I〜III] かずはじめ◉映島巡　マインド アサシン I〜III



ジョジョの奇妙な冒険

[ジョジョの奇妙な冒険] 荒木飛呂彦◉関島眞頼◉山口宏

[ジョジョの奇妙な冒険II] ゴールデンハート／ゴールデンリング　荒木飛呂彦◉宮昌太朗◉大塚ギチ

[人形草紙 あやつり左近] 写楽麿◉小畑健◉山田隆司　からくりぞうし あやつりさこん

[明治剣客浪漫譚 るろうに剣心 巻之一〜巻之二] 和月伸宏◉静霞薫

［明治剣客浪漫譚 るろうに剣心 島原編］
和月伸宏◉安芸良◉室井ふみえ

［小説・北斗の拳］
武論尊◉原哲夫

［銃夢］ガンム
木城ゆきと◉川村泰久

［WILD HALF］ワイルドハーフ
浅美裕子◉渡辺麻実

［BIO HAZARD］バイオハザード
浅倉究／フラグシップ◉坂本眞一

［ヒカルの碁 Boy Meets Ghost］
ほったゆみ◉小畑 健◉横手美智子


ヒカルの碁

［Xenogears］ゼノギアス
日下部匡俊◉森下直親

［ソムリエ］
甲斐谷忍◉細川布久子◉城アラキ


ONE PIECE

［ONE PIECE］ワンピース
尾田栄一郎◉濱崎達弥

［ONE PIECE ローグタウン編］ワンピース
尾田栄一郎◉浜崎達也

［ONE PIECE ねじまき島の冒険］ワンピース
尾田栄一郎◉浜崎達也

［ONE PIECE 千年竜伝説］ワンピース
尾田栄一郎◉浜崎達也

［ONE PIECE 珍獣島のチョッパー王国］ワンピース
尾田栄一郎◉浜崎達也

［遊☆戯☆王］
高橋和希◉千葉克彦

［サラリーマン金太郎］
本宮ひろ志◉滝直毅

［HUNTER×HUNTER 1～3］ハンター×ハンター
冨樫義博◉岸間信明

［LOVE&DESTROY］ラブ アンド デストロイ
桂正和◉浜崎達也◉後藤隆幸

［SUMMON NIGHT］サモンナイト
都月狩◉飯塚武史

［シャーマンキング］
武井宏之◉三井秀樹

j-BOOKS ★ ORIGINAL STORY

［黄龍の耳 I～II］
大沢在昌◉原哲夫◉鶴岡伸寿

［北のオオカミ］
山際淳司◉今泉伸二

「もう一度デジャ・ヴ」
村山由佳◉志田正重



おいしいコーヒーのいれ方

「キスまでの距離」おいしいコーヒーのいれ方Ⅰ
村山由佳◉志田正重

「僕らの夏」おいしいコーヒーのいれ方Ⅱ
村山由佳◉志田正重

「彼女の朝」おいしいコーヒーのいれ方Ⅲ
村山由佳◉志田正重

「雪の降る音」おいしいコーヒーのいれ方Ⅳ
村山由佳◉志田正重

「緑の午後」おいしいコーヒーのいれ方Ⅴ
村山由佳◉志田正重

「遠い背中」おいしいコーヒーのいれ方Ⅵ
村山由佳◉志田正重

「卒業」
高橋三千綱◉幡地英明

「完殺者真魅」ジェノサイダーまみ
鳴海丈◉鶴田洋久

「完殺者真魅Ⅱ」ジェノサイダーまみⅡ
鳴海丈◉小畑健

「AGITO」アギト
菊地秀行◉宮下あきら

「MIDNIGHT★MAGIC Ⅰ～Ⅷ」ミッドナイト★マジックⅠ～Ⅷ
夢幻◉叶恭弘

「魔界西遊記」
夢幻◉相崎勝美

「夏と花火と私の死体」
乙一◉幡地英明



夏と花火と私の死体

「空飛ぶ船」
多岐友伊◉鷹城冴貴

「ぼくの推理研究」
我孫子武丸◉石月誠人

「死神になった少年」
我孫子武丸◉甲斐谷忍

「海鳴星」
立松和平◉みのもけんじ

「万物の霊長は猫である」
渋谷英樹◉刀根夕子

「水戸黄門的…」
草薙渉◉次原隆二

「SPストリートパフォーマー」
草薙渉◉次原隆二

「BLACK ONIX」ブラック・オニキス
石川考一◉長沢克泰

「空想科学世界ガリバーボーイ」
広井王子◉芦田豊雄

「新選組異聞 火取虫」ひとりむし
絹川亜希子◉坂本眞一

「眠り姫は魔法を使う」
霧咲遼樹◉藤崎竜

「RIPPER GAME」リパーゲーム
霧咲遼樹◉藤崎竜

「D室の子猫の冒険」
霧咲遼樹◉藤崎竜


ジハード

「ジハードⅠ～Ⅴ」
定金伸治◉山根和俊

「ジハードⅥ～Ⅸ」
定金伸治◉芝美奈子

「ジハード外伝」
定金伸治◉芝美奈子

「KLAN」クラン
田中芳樹◉坂本眞一

「大根性」
三谷幸喜◉薮野てんや

「ZERO」ゼロ
映島巡◉かずはじめ

「紅衣英雄譚異聞 オデュッセイア」
映島巡◉厦門潤

「天帝妖狐」
乙一◉幡地英明

「まずは一報ポプラパレスよりⅠ～Ⅱ」
河出智紀◉鷹城冴貴

「彼が狼だった日 上・下」
北方謙三◉大島やすいち

「ベイスボール★キッズ」
清水てつき◉鶴岡伸寿

「ランニング・オブ」
大木智洋◉森田信吾

「時限爆呪」
希崎火夜◉矢吹健太朗

「三番目の転校生」
城崎火也◉しんがぎん

「禁じられた鏡」
城崎火也◉しんがぎん

「グレイ・チェンバー」
小川一水◉三好ナオト

JUMP j BOOKS

「週刊少年ジャンプ」が贈る、
話題のノベルシリーズ!!
小説＆コミックのニューエンターテイメントを
キミは体験したか!?



JUMP j BOOKS
JUMP j BOOKS
最新刊3点!!絶賛発売中!!
テニスの名門・青春学園中等部に、「王子様」がやってきた! 超人気テニスコミック、初ノベライズ!
【テニスの王子様 The Prince Has Come!!】
許斐剛●影山由美
突然、社長室長になった金太郎。バリバリと仕事に取り組むが社内には不穏な噂が…。TVドラマ小説化!!
【サラリーマン金太郎special】
本宮ひろ志●白石まみ
無敵であるはずの伝説超人が次々と惨殺された!? 犯人は誰? 人気作の小説版、堂々登場!!
【キン肉マンII世SP 伝説超人(レジェンド)全滅!】
ゆでたまご●小西マサテル